
仮面ライダー電王vs仮面ライダー555

フラッシュミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王vs仮面ライダー555

【Nコード】

N7258F

【作者名】

フラッシュミイ

【あらすじ】

それぞれの戦いを終えた、仮面ライダー555。そして仮面ライダー電王。しかし戦いはこれで終わりではなかった。戦いは続いている…。敵は力をためていた。新たな戦いをおこすために…。ここで、新たな戦いが始まる。

Episode:0 プロローグ(前書き)

特撮系の小説の投稿は初めてなので、色々矛盾が出るかもしれません。

誤字脱字が多いかも知れませんが、よろしく願います。
誤字脱字が許せない。そういう方はお戻りください。

Episode:0 プロローグ

オルフェノクと戦っていた、仮面ライダーファイズ・カイザ・デルタ。

イマジンと戦ってきた、仮面ライダー電王・仮面ライダーNEW電王・仮面ライダーゼロノス。

今、ここに二つの敵が、同時に現れる。

2つの敵が、同時に現れたとき、6人の戦士の新たなる戦いがここに始まる。

2008年 12月 下旬

ここは暗闇の中にある研究室…

そこにいるのはある一つの影。そしてその前には、誰かが入っているとされる箱。

しかし、それは人間の姿とは、いえない、二つの影とも形が異形なのだ。

そうその異形の者とは、オルフェノク。

ファイズ達が、仲間の犠牲を払って倒してきた、敵だ。

「王。もうすぐです。もうすぐであなたは、また復活します」

そう声を出すのは、ロブスターオルフェノクの影山冴子である。

オルフェノクは、人間の進化した形でいずれ、滅ぶ運命だが、

彼女だけは、4年前一度オルフェノクの王が復活した時に、不老不死の力を手に入れてる。

そして、この4年間、王を生き返らせるために、日々研究を重ねてたのだ。

「へ〜。おもしろそうだな。俺にも手伝わせてくれよ」

どこからもなく聞こえてきた声。

ロブスターオルフェノクが振り向くと、そこには、ひとりの男が立っていた。

彼女とつさに後ろにいる、王をかばうように戦闘態勢に入るが、

「あなたは、誰？何処からここに入ってきたの」

彼女の質問に男は、

「俺はカイ。あれ？どうやって此処に入ってきたっけ？」

彼の名前はカイ。

彼は、未来をイマジンの世界にしようとし、この時代を侵略しようとしていたが、

最後の決戦で、負け砂となって消滅したはずなのだが…

「まあ、どこから入ってきたなんて、どうでも、いいけどさ。それよりあんたに協力してあげるよ。俺」

カイはそっぴい笑顔で微笑む。

「なにを言うの。あなたに。私の仕事が手伝えるはずがないわ」
ロブスターオルフェノクは、そっぴいながらも戦闘隊形崩さない。

「はっはっ。言うね。じゃこれならどう?」
そういうとカイはさっきの表情が一変。
右手の指を「パチッ」と鳴らす。
するとそこに、一つの影が現れた。
イマジンの、モールイマジンだ。

「なんなのこれは?あなたは一体何者?」
突然、カイが指を鳴らしたら、一つの異形の影。
オルフェノクでもない、あの姿は何?

「だから、俺はカイだって。こいつらはイマジン。未来を変えるためにこの時代にやってきた。」
カイは淡々と説明する

「未来から?そんなじゃ、あなたも未来からきたの?」
ロブスターオルフェノクは聞き返す。

「さあ?それを確かめるためにここに居る。そしたら俺の時間も手に入る。でどうするの俺と協力しない?」
カイは言う

彼女は考えていた。確かにこのまま一人でやるには無理がある。
それなら人種は違えども人数は多いほうがいい。
そう人数が多くなければやられてしまう。
そう、彼らに…

「分かったわ。手を組みましょう」
ロブスターオルフェノクは、戦闘態勢を解く。

「よかった。じゃこれから、よろしくな」
カイは先ほどよりも数倍笑みを増していた。

Episode:0 プロローグ(後書き)

文章を考えるのは、難しい。

改めてそう思いましたが、これから頑張って書いていきたいと思
います。

誤字脱字などが、あったら教えてください。

Episode 1 再会（前書き）

第2話です。

よろしくお願いします。

Episode:1 再会

2009年 1月9日

とあるクリーニング屋

ここに3人の男女がいる。

どうやら少しもめているようだが…

「どうしてくれるのよ！これじゃ、うちの店に客がなくなるじゃない！」

女の人が、目の前にいる男性に叫んでいる。

「何だよ。おれが悪いってのかよ。だいたい、洗濯屋に来る奴なんかいつも一緒でかわらないだろ?!」

不機嫌そうな彼が何かをしたから怒られているみたいだが…

「違うよ！たつ君。常連さんがいるから客が増えるんだよ！だからお客さんが来るんだよ！大事にしないとお客さんは。そうだよね。

真理ちゃん！」

不機嫌そうな彼とは違って変わった性格をしてる。

さきほどの女の方は、真理という名前みたいだ。

「そうよ！啓太郎の言うとおりよ！だいたい…って巧は…っていいい」

さきほどの男の方は、啓太郎と言うようだ。

そして、さっきほどの不機嫌な彼は巧と言うみたいだが、彼は此処にはいない。

外から、バイクの音が聞こえる。

真理と啓太郎が外に出ると、巧がバイクに乗って出行った跡でそこには巧の姿はなかった。

2人が出てきた店

そこにはこう書かれていた

「西洋洗濯舗 菊池」

「まったくもう！何でいつもこうなのよ！」
真理は、巧がないのに叫んでいる…

「あの～すいません。誰かいませんか？」
いつの間にか、店には人が入っていた。
女性のようなが、いつの間に入ったのか

「あつ。すいませんんですか？」
慌てて店に入る、啓太郎。
それに続いて真理が店に入った。

「すいません。家の洗濯機が壊れたもので。これお願いして大丈夫かしら？」
おそらく、ここにくるのは初めてだろうか…
手には、洗濯物の入った袋がある

「どうぞ、カウンターにおいてください」
真理が言う。

「あつどうも」

女性は、カウンターの上に洗濯物の入った袋を置く。

「あの〜そちらの方は？」

女性は啓太郎の方に顔を向ける。

「気にしないでください。えっと…はじめての方ですね。こちらに名前を書いてください」

真理は、紙を出し、それを書き始める。女性

一方の啓太郎は固まっていた。

その女性の美しさに…

「これでいいですか？」

女性は紙を差し出す

「えっと、野上愛理さんですか？」

真理は名前を確認する

「はい。」

愛理は返事をする

一方の巧はとうとうと…

「たっく、冗談じゃねえ」

巧は嘆いていた。

そう自分は、昔、真理や、啓太郎の「夢」を守ると決めたが、いつもこうなる。

あの戦いが終わって、4年たった。

そう彼こそが、4年前の戦いで戦っていた、仮面ライダーファイズである。

平和は続いてほしい。

そう思っていた。

そんなとき、隣からバイクの音が聞こえる
運転している人は懐かしい人で…

「久しぶりだな。乾」

隣から、男の声がした。

E p i s o d e : i 再会（後書き）

文の長さってどのくらいがいいんだろう？

少し考えながら、書いてます。

この話で愛理を出してみました。

次にはあの人を登場させます。

Episode:2 出会い(前書き)

第2話です。

よろしくお願ひします

Episode:2 出会い

「お前は…海棠じゃないか！久しぶりだな！」
先ほどの男は海棠というらしい。

そう海棠だ。

彼は、オルフェノクだが、巧達と一緒に戦ってきた仲間である。

「なんだ。あれ4年振りぐらいじゃねえか？久しぶりだな」
海棠はそういいながらバイクから降りる

「そうだな」

続いて、巧も降りる

「わああゝ。ちょっと…どいて下さい」

何処から声がする。

「今、何処からか声がしなかったか？」

海棠が言う

「おいつ！あそこ！」

坂の上からもうスピードで降りてくる、自転車にのった少年。

「なにやってんだよ。おい！お前ブレーキを使え！」

巧は声を上げる。

「ブレーキが壊れて止まれないんです」

少年は叫ぶがその間に自転車のスピードを上げている。

「とにかく、乾危ね。」

そう気づいたら、自転車は目の前で来ていた。

…ぶつかる

そう思っていたが気づくと目の前に来ていた自電車は無くなっていた。

そう乗っていた少年も。

「なんだったんだ。今のは？」

巧は言う。

「さあ？まあ俺はこれから用事なんでじゃまたな」

海堂はそういい、バイクに乗ってどこかへ行ってしまった

「さて俺も行くか」

巧もそう言うが、まだ店に帰るのが気まずいのか、そのまま来た道を戻らず、適当に進んでいくと、目の前には先ほどみた自転車が転がっている。

そして少し離れた所には、先ほどの少年がいるが、周りにはガラの悪そうな男性が数人少年を囲んでいる。

少し離れているが、話は十分聞こえてくる。

「おいおい。兄ちゃんどうして、くれるんだよ！俺の、新品の靴ボロボロじゃないか？どうしてくれるんだよ。弁償してくれないかな？べ・ん・しよう。」

そうおいつて男は靴を見せるが、全然汚れているようには見えない。

「えっと、そんなに汚れてるようには…」

少年は弁明をするがそれが通じるはずがない

「はっ？お前人に当たったのにその態度はないだろ？」
また他の男性が出てくる

「おい。お前ら。やめる。うつつしいんだよ」
巧は、声を出す。

「なんだと。よそ者は引っ込んでろ」
先に少年に文句を言って男性が男に殴りかかるが、避けられ逆に殴られてしまう。

そんな彼に、恐れをなしたのか、他の男性数人も逃げ出していった。

「あの…有難うございます。お名前は？」
少年は、巧に尋ねる。

「乾巧だ。お前は？」
今度は逆に、巧が少年に向かって尋ねる

「僕は、野上良太郎です。先ほどは有難うございました」
良太郎は名乗るとすかさず礼を言う

そう、彼の名前は、野上良太郎
2007年仲間とともにイマジンと共に戦ってきた
仮面ライダー電王なのである。

「いいや。別にたいした事はしてないが、お前さっき坂を物凄い勢いで降りてなかったか？」
巧は先ほどのことを聞く

「あつ。さっきの。」

良太郎は思い出したかの言う

「さっきの…確かに僕ですが…大丈夫でしたか？怪我なかったですか？」

良太郎はまさかと慌てたように聞く

「大丈夫だ。けがなんかしてない。それよりお前は大丈夫なのか？」
巧は怪我してないと言い、逆に良太郎は平気だったのかと尋ねる。

「僕は大丈夫慣れっこですから」
良太郎は笑顔で言う。

「慣れっこって」
巧はその言葉にあきれる
いつも、こんな目にあっているのか…

「それじゃ、巧さん、有難うございました」
良太郎はもう一度礼を言う。
そして、去っていった

「さて俺もそろそろ帰るか」
巧はそういいながら、来た道に戻って言った。

出会って分かれた良太郎と巧。
しかし、彼らはまた、会うことになる…

Episode:2 出会い(後書き)

えっと、巧と海堂のキャラがいまいち掴めません…。

特に海堂…

原作と違った部分があったかもしれませんが、そこのところはどうぞお許してください。

一部分削ってみました。

次回は。ミルク・ディッパーの様子を書きたいと思います。

Episode 3 久々に会う（前書き）

第3話です。

なんか前回より長くなったような気が…

Episode:3 久々に出会う

ここは、ミルクディッパー。良太郎の姉、愛理が勤める店。中では、コーヒーを入れている愛理がいる。

そこには、先ほどよりも服が汚れている良太郎が居る

「ただいま。姉さん」

中には、愛理狙いの男性で一杯だ。

しかし、周りの目線には、目もくれず、コーヒーを入れる愛理

「あら。遅かったじゃない。良ちゃん今日はどうしたの？ずいぶん汚れちゃって」

良太郎が帰ったことに気づき、カウンターから出てくる良太郎

「まあ、ちょっとね」

言葉を詰まらし、そして辺りを見回す良太郎。

店の中心にはアンティークの天体望遠鏡が飾られている。そして壁には、愛理が書かれた絵。

そう、2007年には色々なことがあった。

自分は、電王に変身して、仲間と共に一緒に戦ってきた。

2008年、カイとの戦いを終え、分かれた仲間達。

「いつか、未来で」

そう思っていたが、ここ数ヶ月前、思いもよらぬ形で再会した。新たな敵死朗の出現で…

彼を倒して、平和はまた守られた。

しかし、もう会うことはないだろう…

今の電王は、未来の良太郎の孫である幸太郎だから…。

「良ちゃん。これ」

カウンターに置かれた、食事。

愛理が良太郎のためにつくる。健康食？だ。

「あつありがとう。姉さん」

良太郎は、一瞬戸惑いながらも、料理を食べ始める。

「あつ。そうだ良ちゃん。洗濯物出してきたわよ」

愛理は、思い出したかのように言う

「出してきたって、コインランドリーに？」

そう、最近なぜか壊れてしまった洗濯機。

つい先ほどまで、愛理は、洗濯物を出しに

「西洋洗濯舗 菊池」行っていたのだ。

しかし良太郎はその店のことを知らないため

頭に思い浮かんだのは、コインランドリーしか思い浮かばなかったのだ。

「それがね、洗濯物を扱ってくれる店があるって噂で聞いて、そこに行つて預けてきたの」

愛理はコーヒーを入れながら話す。

良太郎は、料理を口に入れる。

だが、愛理は目の前にいるのに気づいてなかった。

良太郎が顔をしかめながら料理を食べている良太郎に…。

夕方…

「ただいま。」

巧は店の裏口から入ってくる。

「あつ、たつ君丁度良かった。これアイロン掛けるの手伝って」
啓太郎は奥から声を出す。
部屋には、山のように詰まれた洗濯物がある

「おい。これはどうした」

巧は驚き声を上げる

自分が、ここを出る前には、こんなに洗濯物は無かったはずだ。

「それが、巧がいなくなった後、お客様が持って来たのよ。こんなに」

真理が言う。

おそらく一つにまとめられているのが、そのお客様の者だろう

「何人家族だよ」

巧は、顔をしかめながら洗濯物にアイロンを掛け始める

「姉弟と二人暮らしらしいよ」

真理は、一つ洗濯物をアイロンを掛け、また一つ洗濯物にアイロンを掛け始める。

「はあ？二人暮らしでなんでこんなに洗濯物があるんだ？」

巧も文句をいいながら、洗濯物にアイロンを掛ける

「なんか。弟さんの洗濯物がいつも多いらしいよ」

啓太郎が、奥から出てきて、真理が掛けた、洗濯物を取り、綺麗にたたみはじめると、女の人より、男の人の方が多いが、男の人の量が半端じゃない

「たつく、ありえないだろこれ」

巧は、手を止める

「ちょっと。巧！手を動かす手を」

真理は言う。

「でも。その弟さんどんな子なんだろ？こんなに洗濯物があつて」
啓太郎は不思議に思いながら洗濯物を畳む。

その時、玄関のドアのチャイムが鳴った。

「はい、今あけます」

真理はそついい玄関を開ける

「久しぶり。真理」

女性は言う

「里奈。久しぶり」

真理は笑顔で言う

「久しぶり」

そして里奈の隣に居た、男性も言う

三原と里奈この2人も、4年前巧達と一緒にオルフェノクと戦って

きた仲間だ。

戦いを終えてから二人は今養護施設「創才児童園」で働いてる。

「三原君も久しぶり」

真理が、三原に顔を向け言う

里奈が部屋を覗く

「忙しそうね。」

里奈が言う

「うん。ちょっと時間掛かるけど、待ってってね」

真理はそういうと再び戻り、作業を始める

それから、小2時間ぐらいして、仕事が終わった

「ごめん。待った？」

真理は仕事を終わらせ、里奈達が待っているところに行く

「うん。大丈夫よ。こっちだって急に来たしさ」

里奈は言う

「しかし、ここもいつも大変だな」

三原は辺りを見て言う

「いつもは、こんなんじゃないけどね」

真理は苦笑いをする

「そういうば、どうしてここに？」

真理は尋ねてきた理由を聞く

「久々に、真理とかに会いたかったって言うのもあるかな」
里奈は思い出したかのように言う

「4年前は、あんなに一緒に居たのに最近はお互いに忙しくて全然
だったからな」

三原は少し、暗い声で言う。
2人も少し暗くなる

「まあ、それは別として明日、乾君とか菊池君もどっか行かない？
いい店があるんだ」

里奈は言う。

「いいけど。何処に？」

真理が聞くと

「コーヒー屋。すごく美味しいらしんだけど……」
三原は口を濁らす

「どうしたの？」

真理が、言葉を濁らした三原を不思議に思い聞く

「行けば分かるわ。2人はどう？一緒に行かない？」
里奈は奥で明日の配達の準備をしている2人に聞く

「いいけど、午後からで。配達済ませないといけないし」
啓太郎は名前と住所を確認しながら配達の準備をしている

「俺はパス。コーヒーなんて猫舌の天敵だ」

巧はそういつと配達の準備を終え、真理達の居たところに行く

「何言ってるの巧。アイスにしてもらえばいいじゃない。」
真理の言葉に巧は、

「お前な……」

巧が文句を言おうとするがその時、啓太郎が慌てて、

「大変だよ。真理ちゃん。さっきのお客さん愛理さんの住所書いて貰うの忘れたでしょ？」

啓太郎が紙を見せる

「あっ!どうしょ」

真理もそれに気づき慌てる

「とにかく、連絡しないと」

真理は、書かれた電話番号に連絡する。

Episode:3 久々に会う(後書き)

三原の性格が全然分からない。
誰か分かる人教えて。

誤字脱字などがあったら、よろしくおねがいします。

E p i s o d e ; 4 再び出会ったのは…(前書き)

第4話です。

2人がまた出会います

Episode 4 再び出会ったのは…

こちら、ミルクディッパー

ここは、さつきから大繁盛だ。
そんな時、電話が入る。

「良ちゃん。電話出てくれる」

愛理は、ウエイトレスとして、働いていた、良太郎に声を掛ける

「あつ、分かった」

良太郎は、そういい電話を取る

「はい。野上です」

良太郎は電話に出る

「あつ、すみません。先ほど、洗濯物を預かったものですが、愛理
さんいらっしゃいますか？」

真理は、少し慌わてている。

「あつ、はい少々お待ちください」

良太郎が言うと、遠くから「姉さん」と呼ぶ声が電話口に聞こえる

「お電話変わりました。どうしましたか？」
愛理がたずねる

「すみません」西洋洗濯舗 菊池「です」

真理が電話の応答に答える

「あつ。どうしたんですか？」

愛理は不思議そうに聞く

「あの、先ほど住所を聞き忘れたので、今教えてもらえることは、出来ませんか？」

真理は申し訳ないように聞くが。

「あつ、じゃ明日取りに行きます」

愛理が言う

「そんな、お客さんに取りにいかせるなんて。」

真理は慌てて断ろうとするが、

「いいの。少しの間だけ、店閉めとけばいいし。明日は用事もあるしね」

愛理が言う

「でも・・・愛理さんが、取りに行ったら、仕事が出来なく・・・」
真理は言葉を詰まらす。

わざわざ仕事を中断して取りにきて貰うわけにはいかない

「そうね。あつ、良ちゃんちょっと」

電話口から誰かを呼ぶ声がする。

声を聞くと最初に電話にでた人みたいだが…

「あつ、あした私の代わりに良ちゃんが取りに行くので」
愛理が言う。

電話口では、少し慌わてている声がする

「あの良ちゃんって…」

真理は誰だか分からないのでたずねると

「弟です。来るのに時間が掛かるかも知れませんが、よろしくお願ひします。」

そついうと電話が切れた

ミルクディッパー

「姉さん。ぼく場所知らないよ…」

良太郎は少し、元気がない声で言う

「大丈夫よ！ちゃんと、場所書いた紙渡すから
愛理が言う。」

そついう愛理に少し肩を落とす良太郎だった

西洋洗濯舗 菊池

「愛理さん。なんだって？」

啓太郎は、電話を持ってしている状態の真理に聞くと

「あした。愛理さんの弟さんが直接取りに来るって
真理は電話を置く

「でも、場所分かるの？」

啓太郎は聞く

「分からないと思う。電話で少し時間掛かるって言ってたしね」

真理は、頭を抱えながら言う

「まあ、それでも午前中には、終わるよきつと」

啓太郎は笑顔で言う

「そうね。じゃ里奈、配達終わったら一緒にそのコピー屋に行こうね」

真理は言う。

「どうした？なんかあったのか？」

巧はその場を少し離れていたため、電話の内容を知らなかった。

しかし、2人は愛理の言う少し時間が掛かるのもう一つの意味を知らなかった。

次の日、 1月10日

無事に配達を終えた、真理と巧。

入ると、カウンターに座ったままの啓太郎あ居る

「あれ？啓太郎まだ着てないの？」

真理は尋ねる

「そうなんだよね。でも2時間ぐらい前に家を出たって言う連絡は貰ったんだけど」

啓太郎は少し疲れている。

きつとずっと座っていたのだろう
目が疲れてきている。

「もう一度連絡してみれば？」
真理がそういうと、啓太郎は、電話を取り、電話をするが数十秒後
すぐに電話を切る

「なんだって？」
真理が聞くと

「もうすぐ着くはずだって」
啓太郎が言つと

「もうすぐって、一緒に居るわけじゃないのに分かるわけねえだろ
う」

巧が言つと、待っているのが嫌だったのか、店の奥に入つていつた
「がっしゃーん」

ものすごい音がして、部屋から出てくる巧

「どうした！今すごい音が……」
巧が出てきて目を向けると

「なんだか……よく分からないけど、人が電信柱に……」
啓太郎が慌てて説明する

「巧？ずっと見ているけどさ？知ってる人？」
真理は、巧が、ずっと彼を見ているため尋ねる

「昨日、会った奴だ」
巧が言つ。

そう、そこには、良太郎が倒れていた。

「そう…でもどうしよう。まだ洗濯物も取りに来てないし。彼をこのままにしとく訳には…」

真理は困っていた。

「真理どうする？これからいくけど？」

里奈と三原だ。

どうやら、そろそろ行くようだが…

「うん。ごめんまだ仕事終わりそうにないんだ。また誘ってくれる？」

真理は申し訳なさそうに言う

「そう。分かったじゃあね」

里奈が言う

「仕事頑張れよ」

三原も言う

そういうと2人はバイクで去って行く。

「いいの？真理ちゃん？」

啓太郎は心配そうに尋ねる。

「仕事だから」

真理はそついいながら店の中に入っていく

啓太郎もそれを追いかける

一方の巧は、倒れた良太郎を抱えながら店に入っていった

Episode:4 再び出会ったのは…(後書き)

これから、出会った、巧と良太郎。

えっと、因みに、これは、さらば電王の時間軸の後の話で、良太郎はまたモモタロス達と別れた後になっています。

どうやって、モモタロス達を登場させようか迷ってます。うーん、どうしよう…

Episode 5 目が覚めると・・・(前書き)

第5話です

誤字脱字などがあつたら教えてください
では、どうぞー。

Episode 5 目が覚めると・・・

ここは、啓太郎の店の中。

ソファーには良太郎が寝ている。当たり所が、悪かったのか、まだ目覚めない。

啓太郎と真理そして巧は近くにあるソファーに座っている。

「大丈夫か？目覚めないみたいだけど」

巧は、少し小さな声で言う。

「そうだね。」

啓太郎が心配そうに覗き込む

「だって、電信柱に当たったのよ。そう簡単に目は覚めないわよ」
真理はそういいながら、額にぬれたタオルを置く。

「あつ。洗濯物。あつちに置きっぱなしだった。」

啓太郎は思い出したかの言う。

そう店のカウンターに置きっぱなしにしていたのだ。

でも、今、倒れて横になって倒れている人がいるのに自分だけこの場を離れるわけには…

「啓太郎行つていいよ。2人居れば十分だし、洗濯物いつまでもあつちに置いとくわけには

いかないしさ」

真理が言う。

「分かった。でもすぐに戻るね」

啓太郎はそっくり、店の入り口に戻っていく

「っあれ？ここは？」

良太郎は目をこすりながら起きるが、まだかすかに頭に痛みがあるようだ。

「良太郎大丈夫か？」

巧が聞く

「あなたは、昨日の巧さん？…また助けてくれたんですか？ありがとうございます」

良太郎は昨日の時みたいに礼を言う

巧は少し照れている。

「あのここは？」

自分が見慣れない所にいる良太郎。

この質問には、巧の隣にいた、真理が答え

「ここは、店の中。あなた私達の店の目の前で倒れたのよ？どうしてあんな所で」

真理は尋ねる。

一方の良太郎は思い出している。そして思い出したのか「あっ」と声をだす。

どうやら良太郎の話によると、突然、前タイヤがパンクし、電信柱にぶつかつたみたいだ。

因みに後ろのタイヤは、大丈夫だったので、後側中心にブレーキをかけていたので、

それほど大事には至らなかつたみたいだ。

「お前、俺と会つた時には不良にやられてたし、運ないな」
巧が言うと

「巧！そういうことはいつちやだめでしょ」
真理が怒る

「あつ、いいですよ。運がないのは本当なので」
良太郎が言う。

それでも言わないと、喧嘩になりそうだったので。
いや、すでになつていたかもしれない…

「たつ君。真理ちゃん。洗濯物持つて来たよ。あれ彼目覚めたんだ。」

啓太郎は、荷物を持ちながら目がさめた良太郎に目を向ける

「洗濯物…つあ！そうだ」

良太郎が声をいきなりだしたので3人は驚いた

「どうしたの？急に？」
真理が聞く

「すみません。こちら辺で「西洋洗濯舗 菊池」って店知りませんか？姉さんが預けた洗濯物を取りにきたんですが」
良太郎が言うと、3人はまた驚いた。

そう、良太郎が言った店はまさしくこの事だ。

「えっと、君名前なんていうの？私は園田真理って言うんだけど」
真理がまさかと思い、自分の名前を言うと、

「僕は、野上良太郎です。」

良太郎は、一礼をし、自己紹介をした

「僕は、菊池啓太郎。はいこれ。」

啓太郎も自己紹介し、自分が持っていた、洗濯物を渡すが、

良太郎はイマイチ状況が掴めてなく

「良太郎。お前が居るここが「西洋洗濯舗 菊池」なんだよ
巧が言つと良太郎は

「えっと…じゃこれが姉さんが預けた荷物ですか？」

良太郎の質問に、啓太郎と真理は頷く

「そうですね。有難うございました」

そついいながら、良太郎は立ちあがり出口に向かう

「もう。大丈夫なの？」

啓太郎が聞くと良太郎は「大丈夫です」と言いながら、道路に出て
行くがすぐに、段差に躓く。

「そつだ。家まで送つてつてあげるよ」

真理が言つ

「えっ、でもそれは…」

良太郎は言葉を詰まらす。

そつ、それは流石に悪い

「そつだね。もともとうちの洗濯物は、運んでるしよ」

啓太郎も真理の意見に賛成し、ついには巧も

「いいじゃねえか」

3人の意見が一致したことで、良太郎は、車に乗り、自分の家まで送っててもらおうことになった。

運転していた、啓太郎は、良太郎に道を聞きながら、数十分後ミルクディッパーに着く事になる。因みに巧は、バイクに乗って後ろから追いかけている
ミルクディッパー

今は、休憩時間中だろうか、closeとなっている

「あの。本当にありがとうございます」

良太郎が言う

「いいのよ。別にじゃ…」

真理が、そっぴい立ち去ろうとする。

「あの。お礼と言ったら何ですけど、良かったらコーヒー飲んで行きませんか？」

良太郎が言う

「えっ。でも…」

真理が表札をみて言う。

closeなのに、コーヒーを貰うのは、

「閉まってるのに悪いよ」

啓太郎も断る

「俺は、その…」

巧は、自分が猫舌というのが恥ずかしいのか…
そんな彼を見て良太郎は、

「ここまで送ってくれてお礼がしたいんです」
良太郎が頼み込む。そんな良太郎を見たからなのか、3人はokする。

「姉さん。ただいま」

良太郎はミルクディッパーのドアを開ける。

closeなので誰もいないと思ってた、

姉と2人を除いては

Episode 5 目が覚めると・・・(後書き)

えっと…ひよとしっいたら書いていく内に矛盾が出てくるかも…。
気をつけます。

感想などがあつたらよろしくお願いします

Episode 6 コーヒーを飲もう(前書き)

れんぞく投稿です。

よろしくお願ひします。

Episode:6 コーヒーを飲む

ミルクディッパーに入帰った良太郎。

そして巧・真理・啓太郎

愛理は目の前に座っているカウンター席の二人にコーヒーを入れて
いる

「あらっ良ちゃん。お帰りなさい。そちらの方は…」

愛理が良太郎の後ろに居る3人に気がつく

確か洗濯屋さんの…

「そう…ここまで送ってきて貰ったんだ。お礼にコーヒーをご馳走
したいんだけど駄目かな？」

良太郎が聞くと

「いいわよ。じゃこちらに座って」

愛理が、カウンター席に座ってる2人の隣を指差す

「えっでも…」

真理は戸惑う

「あつかまいません…真理！」
里奈が言う。

そうコーヒーを飲んでいたのは、里奈だったのだ。
そうなる隣に居るのは、

「あれ？時間が掛かるんじゃない…」
三原だ。

そう2人が行こうと言っていた店は、ミルクディッパだったのだ。

「里奈が誘ってくれた店ってこの事だったんだ」

真理はそういうしながら、隣の席座る。

その隣に、巧、啓太郎と座る。

「でも、どうしてここに？」

里奈は不思議に思う。

そう自分達は、誘っただけで、店の名前までは、教えてないはずじゃ…

「洗濯物を取りに来た子が、そこにいる愛理さんの弟さんでここまで送ったのよ。」

真理が説明する

「そしたら、彼、良太郎君が、コーヒーをくれるって行ってそれが、愛理さんの店だったって事」

啓太郎が付け出しに言う

「あれっ？そういうえば姉さん買い物に行くんじゃ…」

愛理の手伝いをしながら、良太郎は思い出した

「それがね…」

愛理も思い出したのように語りだし

・・・回想・・・

「あれ？閉まってる？」

三原が言う。

玄関の前にはcloseという標識が出てる

「今日はやってないのかしら？」

里奈が不思議に思うすると、ドアが開き

「あらっ？お客様？ごめんなさい。今日は、買い物に行く用事があるって今閉めているの。また来てくれないかしら」
愛理が申し訳なさそうに言う

その言葉に、里奈と三原は帰ろうとするが、

「それじゃ、僕が行きますよ」

何処からか声がする。男の人の声がする。格好が不気味な人だ。

「なに言ってるの〜君は？愛理さん僕が行きますよ」
今度は少し陽気な男が現れた。

「あらっ。三浦さんに尾崎さん。でも……」
愛理は困っていた。流石に買い物頼むのはどうかと思ってるようだ。

「いいですよ。愛理さんそれにせっかく愛理さんのコーヒーを人が居るんだし。僕が行きますよ」
三浦は言う

「いいや。僕が行きます」

尾崎は、三浦に対抗するかのようにつ
数秒二人の言い争いが続き、

「分かりました。じゃ二人でお願いします」

愛理はニツコリと笑いながら言う。2人はすぐに笑顔になり、買い物をするべく一目散に走っていった。気がついたら2人の姿はな
く…

「えっと、お2人さん。大丈夫です。コーヒーどうぞ」

愛理が、帰ろうとしていた2人を呼びかけ、なかに居れそして今に
いたる

「あつ。そういうことが」

良太郎は思った。

2人は、いつでもここに来ている。

でも、なぜ今日はここに居ないのかと思ったが、そういうことが。

「コーヒーできましたよどうぞ。」

愛理は、真理・巧・啓太郎にそれぞれコーヒーを置いていき

「良ちゃん。私洗濯物、上に持ってとくわ。だから店のことよろしくね」

愛理は、机においておいた洗濯物を持ち、店の奥へと入っていく

「あれ？巧。いつアイスコーヒー頼んだの？」

真理が聞く。そう巧のだけアイスコーヒーになっているのだ

「たっ君。アイスコーヒーって言ってないよね？」

啓太郎も不思議に思う。

「僕が、姉さんに頼みました」

良太郎が言う

「良太郎。お前俺が猫舌って知ってたのか？」
巧は驚きながら聞く

「あつ、やっぱりそうだったのですか。」
良太郎は自分で自分を納得したかの言う

「やっぱりって、知らないのに、アイスコーヒーだったの？」
真理が聞くと良太郎はこう答えた

「いや、店に入る前巧さん、言葉を詰まらせていたからひよっとし
てと思って…」
良太郎が言う。

5人は驚いた。それだけで、巧が、猫舌だと分かるものだろうか…
ましてや、巧と良太郎は昨日あったばかりだ

3人は、そう思いながら、コーヒーを口にした

「おいしい」
真理は思わず声をだす

「だね。確かにおいしいよ」
啓太郎も同じように言う

「だね」
巧は、2人の言ったことを決定づけるように言う。

すると遠くから、愛理を呼ぶ声がして

「すみません。すこし失礼します」

良太郎はそういって、店の奥に入っていった

Episode:6 コーヒーを飲もう(後書き)

ただいま、頑張ってます。

次のライダーが、平成ライダー大集合(ネタバレ?)

見たいなので、原作とかぶりたくないため、頑張ってますけど、
多分、普通に書いてる途中に、次のライダーに入りそう…

Episode 7 1111は、電車の中（前巻）

7話です。

やっとあの方でした。

Episode:7 じじは、電車の中

ここは、砂の中。

そこを走る一本の電車…

「あつゝくそ暇だゝ何かこう面白いことないのか？」
一人の人物が頂垂れてる

「先輩。静かにしてください。」
こちらの人物は、冷静だ

「せやで。騒いでもなにもおこらんで」
こちらの人物は、物事をそこまで深く考えていないようだ

「そうだよ。桃太郎のバーか」
こちらは、まだ少し子供じみている

「んだと。亀公。熊公。それに洩垂れ小僧。それに俺はモモタロス
だ」
さらに苛立ちをあらわにした彼いや、モモタロス。

「先輩。僕にも、ウラタロスって言う名前があるんだよ」

「わいかて。キンタロスって名前があるんやで」

「僕だつてリュウタロスって名前があるんだよ。ひょっとして忘れてた？」

「バーカだゝ。モモタロスのバーカー」

ウラタロス・キンタロス・リュウタロスはそれぞれ言う。
リュウタロスに至っては、最後にモモタロスを馬鹿にして…。

「んだと。小僧」

いすに座っていたモモタロスは立ち上がり、リュウタロスが座っている椅子の方へ行くが、

「あつモモタロスが怒った」

リュウタロスはそれを面白がり、椅子を立ち上がり、その場を逃げるモモタロスはそれを、追う形になる。

そうになると2人は、だんだん騒がしくなる

「まったく。うるさいな」

煩いなどいいながら止める気がまったくないウラタロス

すると騒がしい中に、一人の少女と少年が入ってきて。

少女が

「あんだ達…いい加減にしなさい！」

少女は、騒いでいた2人に、鳩尾を食らわせた。
クリーンヒットした2人は、その場に倒れこむ。

「よく今まで乗車拒否になんなかったね」

少女と一緒に入ってきた少年が言う

「なにすんだ。この鼻くそ…」

何かを言いかげようとしたモモタロスだが、すぐに少女に一蹴され、

「なんですって！私はハナよ！そんな名前で呼ばないで」
ハナは怒っていった

「まあまあ、ハナさん。いつもの事だからさ。あれ幸太郎じゃない？ひさしぶり」

ウラタロスがハナに言う。

そしてハナと一緒に乗ってきた少年幸太郎に気づく。

「俺も居るぞ」

幸太郎の後ろから出てきた男性

「侑斗やないか久しぶりだな。おデブも元気か？」
キンタロスは、侑斗に気づき挨拶をする

「ああ。でも置いてきた。連れてくと煩いからな」
侑斗に言う

「でも。あれ」

幸太郎が指差す先には、デネブの姿が…

どうやら走っているようだが、
そのままデンライナーにのり

「デネブ来るなって言っただろ！大体ゼロライナーはどうした？」
侑斗は怒ってデネブの方へ行き

「ゼロライナーは大丈夫。今デンライナーの後ろに接続している」
デネブは走ってきたのなか息を切らしている。

「お前な……」

侑斗が怒ろうとしたその時

「それより、皆外を見てくれ」

デネブが言う

皆が外を見ると

デンライナーがこれから先行こうとする道がなくなっている。
皆が驚いている

「どうやら、どこかで時間の流れが変わったようです」

デンライナーに、男の人が入ってきた

「どういう事？オーナー？」

ウラタロスは、不思議に思いオーナーに聞く

「そのままの意味です。さっきまであった流れとは別の流れになってきている。過去で何かあったのでしょうか」

オーナーは座りながら言う

「チケットがあればその時間にいけるのですが……」

オーナーは繭を寄せる

そんなとき

「チケットなんてあるわけねえだろ!？」

モモタロスが怒る

「そういえば、幸太郎ディはどうしたの？」

ウラタロスはディが居ないのに気がつく

「そつえば…」

幸太郎も気づき、あたりを見回すがどこにも居ない
すると後ろのドアから

「幸太郎さつき、ドアの目の前でこんなの拾ったよ？」

デイの目の前には、日付の入ったチケットと、真っ白いパスケース

「何？この白いパスケース？」

ハナは不思議そうに言う

「それより。この日付…いって見る価値がありそうだな」

侑斗は、デイが持つもう一つのチケットに目をつける

「えっと、日付は、2009年1月17日？」

幸太郎は書いてある日付を読む

「では、それより、少し前の日付に設定して、過去に向かいましょ
う」

オーナーはそついい、チケットを持つ

「それじゃ、行きますよ。」

オーナーが言うとカードは消え、そのまま過去に向かう

「2009年つてことは…」

ウラタロスは思い出したかのように言う

「あつ！〜良太郎に会える」

リュウタロスは笑顔になる

「そやな。また会えるで」

キンタロスも言う

「だな。良かったな幸太郎」

モモタロスも嬉しそうにいい、幸太郎に話を向ける

「別に…」

幸太郎は、こういうが、顔は嬉しそうだ

「あれそういえば、ハナさんは？」

ウラタロスは言う

皆も気づき顔をあちらこちらに向ける

「皆。ここよ」

ドアが開く

「「あつ」「」

皆は声をそろえて驚いた

列車は過去へと向かう……

Episode 7 二二二は、電車の中（後書き）

やっとだせたよ。モモタロス達。
実際どこで入れようか迷ってた。
因みにチケットと一緒にあった
白いパスケースは後々大事になります。
それでは、また次回…

Episode 8 生き返る者(前書)

第8話です。

よろしくお願ひします

Episode:8 生き返る者

研究室

「本当にあなたには驚かされるわね」

ロブスターオルフェノクが言う

「そうか。」

カイは、無愛想に返事をする。

「まさか。死んだ奴が生き返るとわね」

ロブスターオルフェノクが言う

「生き返らせた訳じゃない。ただ時間を少し弄っただけ。けど……」
カイは笑顔で言うが、途中で顔色を変え

「余計な人まで生き返ったわけね。まあいいわ、こっちは、ラッキークローバーで死んだメンバーも生き返ったし」
絵オブスターオルフェノクが言う

「しかし、びっくりしました。」

紳士的な男が言う

「あれ〜。ぼく死んだはずなのに？どうしてだろ？」
少し子供じみた彼が言う。カイに似てる少年だ

「村上君。それに、北崎君。久しぶりね」
そこにロブスターオルフェノクが現れる

「冴子さん。どうしたのですか。その姿？」
村上は不思議に思う。
なぜ人間の姿ではないのか

「私は4年前、人間の姿を捨て、そして、不老不死になった」
ロブスターオルフェノク否、冴子が言う

「そういえば、琢磨君はどうしたの？僕彼に、めった撃ちにされたくないよね。しかも冴子さんも僕のこと裏切ってたさ」
北崎は思い出したかの言う。
そして、近くにあった石を壁に向かってなげるが、それは壁に当たると同時に砂になる。

「琢磨君なら、あのと逃げた。今はどこかで人間と生きているはずよ。それにしても北崎君あのと時の事まだ怒ってたの？」
ロブスターオルフェノクが聞く

「そうだよ。」
「そういい、北崎は、ロブスターオルフェノクに迫っていく」

「まあ、待てよ。」
カイが、その間に割り居る

「誰？お前？」
北崎は動きを止める

「そんなことよりこれからもっと面白いことがおこるからね？」
俺楽しそうって顔してるだろ？」
カイは素晴らしい笑顔になる

「全然、楽しそうって顔してないし」
北崎は飽きたのか、その場を離れる

「で、どうするのですか？冴子さん？」
村上は、冴子に顔を向ける

「今、ジエイと最近まで生き残ってたオルフェノクとで、ベルトの
保持者である、

乾巧そして三原修二の所に向かってます」
ロブスターオルフェノクが言う。

「場所は何処です？私達も挨拶に行かなければ」
村上は言う

「そうね。確かミルクディッパーって言う店よ」
ロブスターオルフェノクが言う
すると、隣に居た、カイが突然笑いだし

「はっは。なんて偶然なんだろ。それ俺も行くよ」
カイは笑い出し、イマジンを出現させる

「なんですか？あれは？」
村上は驚きだす。
それをみた北崎も驚く

「さあ、いくよ。あいつにも会わないとな…驚くよな」
カイはそういうと、外に向かって歩きだす。

それについてくように、ロブスターオルフェノクそして、村上や北
崎もあるきだす。

Episode:8 生き返る者(後書き)

えっと、北崎や村上さんそれとジエイが生き返りました。皆ラッキークローバーのかたがたを描いてみました。琢磨さんも居るので、少し出しにくいです。さてどうするか…。

Episode:9 ジェイ(前書き)

第9話です

よろしくお願ひします。

Episode:9 ジェイ

ミルクディッパー

「に、してもおいしかったな」
巧は言う

「そうね」
真理も言う

「でも、なんでこんなにおいしいのに。」
啓太郎は不思議に思う

「この客層が問題なんだよ」
三原は言う

「ここはね、愛理さん目当ての客ばかりなのよ。」
里奈が言う

周りを見ると、そこには、忘れ物と描かれたプレゼントが置かれてる

「じゃ里奈が2人だけで、来るのが嫌だった理由は」
真理は理解した顔で聞くと

「ええ、そういうこと」
里奈は苦笑いをする

「そういえば、乾君、ベルトはどうしてる？」
里奈が聞く

「一応ちゃんと持ってるけど、今は車の中」
巧の代わりに、真理が答える

「三原君は？」

真理が三原に尋ねる

「俺も持ってるけど、バイクの中だよ」
三原が言う

「まあ、オルノフェノクは、今になってもたまたまに存在するからな」
巧はそう言うが、それは、戦いが終わって少しの間だけ。
今じゃ、全然だった

5人の中には気まずい空気が流れる

「そろそろ帰らない？」

真理が言う

「そうだな」

巧が席を立つ。

皆それに攀られて席を立つ

「おい。良太郎。支払い頼む」

巧が奥まで聞こえる声で言う

すると、奥から声が聞こえてくるが、

その時一緒に、ものすごい大きな音が聞こえ

「あつ。はい。もう帰るんですか？」

出てきた良太郎。

さっき見たときと比べ、傷がある。

気のせいだろうか…いや気のせいではない
お金を払う5人

「それじゃ。有難うございました」

良太郎は、素晴らしいドアの所まで巧達を送る

…外

「またこれたらいいね」

真理がミルクディッパーを見る

「そうだね」

啓太郎もまた飲みたいと思いミルクディッパーを見ている

「巧も今度は、ホットコーヒー飲めば？おいしいよ」

真理が言うと

「馬鹿！俺は猫舌なんだよ！アイスコーヒーでいいんだよ」
巧は怒りながら言う

そんな5人の前に

「久しぶりだな」

ある黒人の男があらわれた

後ろには、たくさんの人間を引き連れている。

「お前は…」

巧らは、その男性をじっと見つめ

「悪いが、お前らにはここで消えてもらおう」

そういうと黒人の男の目が灰色になり、
突然異形の形、オルフェノクとなる

「お前は、ジエイ！何で
巧は驚いてる。」

「理由は教える気はない」
そういうとジエイ、クロコダイルオルフェノクは巧達に襲い掛かっ
てきた

もちろん、後ろに居る人間いや、オルフェノクも一緒に…

ミルクディッパー

「あら？良ちゃん。皆帰っちゃったの？」
愛理は言う

「うん。美味しかったって」

良太郎は、机の上に残されたコップを片付ける

「そう。良かった」
愛理は笑顔で言った

「にしても、尾崎さんと三浦さん遅いわね」
愛理は、「どうしたのだろ」と思いながら言う

「じゃ、ぼくちよつと見てくるよ」
良太郎は、ドアの方に向かう
良太郎はそう言う外に出て行った

再び外：

「どうした。ファイズ変身しないのか？」
クロコダイルオルフェノクが巧らに近づく
後ろにいる、オルフェノクも一緒だ

「巧！ベルトは」

真理は慌てて言う

「車の中。あっちのほうだ」

巧は言う。

そうベルトがある、所はオルフェノクが居る方向だ

「三原お前は何処に置いてある車」

巧は慌てて聞く

「僕もあっちだ」

三原は言う。

「どうするの。これじゃ」

里奈が言葉を詰らせる

「私達…死んじやうよ」

真理が言葉を続けた

「変身しないのか…じゃお前らそのまま死ね」

クロコダイルオルフェノクが腕の振り下ろそうとする

E p i s o d e : 9 ジェイ（後書き）

ラッキークローバのジェイを出してみました。
彼の口調絶対に違う気がします。

まあ、許してください。

誤字脱字・感想などがある方はお願いします。

Episode:10 現れるもの(前書き)

久々にあの方、登場です。

それでは、第10話どうぞー！。

Episode:10 現れるもの

ククロダイルオルフェノクの腕が振り下ろされる
だが、そんなとき

「尾崎さんと、三浦さんどこに居るかな？」
自転車跨る、良太郎。
だが、目の前の人物に激突する

「痛っ。あのすいませ…」
良太郎は言葉が詰った。
目の前に居るのは、イマジンじゃない
存在だから

「良太郎。逃げる！」
巧は声を荒げる

「無駄だ死ね」
オルフェノクが良太郎に向かってくる
しかし、それは良太郎の目の前でとまった

「おい。お前早く逃げる！」
その人物はスネークオルフェノク。
海堂だった

「海堂！」
巧が言う

「なにやってんだ。お前ら！変身しろ！」
スネークオルフェノクの海堂が言う

「(変身?)」

良太郎は、その言葉を繰り返した
きつとこの人たちはこの怪物と戦ってきたのかもしいない

「車の中と、バイクの中にベルトがあるんだ！」
啓太郎が口にする

「なるほど。だから変身しないのか」
クロコダイルオルフェノクが言う

「馬鹿！」

巧は、啓太郎をたたく

「じゃ、さっそく貰うとするか」
クロコダイルオルフェノクは、後ろに居るオルフェノク達に指示し、
ベルトを取りに行かせる
彼らは、車の中を荒し、バイクの中を探しベルトを見つけ出した

「(彼らは、戦いかたを知ってる…なら)」
良太郎は、オルフェノク達が居る場所へ向かう

「これで…」
オルフェノク達が、2つのケースに入ったベルトを持つ
だが、それはすぐに無くなった
良太郎が2つのベルトを取ったからだ

「何？あいつ俺達が怖くないのか？」

クロコダイルオルフェノクが言う

巧はかれが自分達を見てないのに気づき、
彼を押し倒した

「良太郎。投げろ！」

巧が呼びかける

良太郎はそれに気づいたのか、カ一杯2つのケースを投げる
だが、それは届かないに思えた
その時

「距離が足りねえよ！」

スネークオルフェノクが、片腕を伸ばし、巧達の所に届くようにした

「ありがとな！海堂！そして良太郎」

巧は、素晴らしいケースを開ける

三原も続けて開ける

そして、ベルトを取り出す

携帯電話を取り出し、

555 enter

standing by

「変身」

巧は素晴らしい携帯電話をベルトにセットする

complete

巧は、銀・赤・黒で構成された仮面ライダーファイズに変身

333 enter

standing by

「変身」

三原が手に握っているグリップに向け言い、ベルトに差し込む

complete

三原は、黒に白い線が入った、仮面ライダーデルタに変身

「何だ。お前！」

クロコダイルオルフェノクは、デルタに驚いた。

無理も無い。彼が生きているとき、デルタはまだ出てきてなかった

「お前が何者だろうと関係ない！おれは、今3回復活した状態！強いんだ」

クロコダイルオルフェノクが叫ぶ

「お前な！それじゃ、一回倒されたらまたすぐ死ぬってことだろ」
ファイズは呆れながら言う

Episode:10 現れるもの(後書き)

今回、良太郎頑張りました。

そして、久々に海堂登場！

次回でジェイとの戦いを終わらせます。

Episode:11 敵の登場(前書き)

第11話です

よろしくお願ひします

Episode:11 敵の登場

オルフェノクと退治する、ファイズとデルタ

「おい。真理ここを離れて良太郎の居るところに行け。」
ファイズが後ろに居る真理に声をかける

「分かった。啓太郎行くよ」
真理は走り出す

「たっ君気をつけて」
啓太郎も続いて走り出した

「三原君、怪我しないでね」
里奈も心配そうに声を掛ける

「分かってる」
デルタは言う

「じゃ」
里奈も2人の後に続いた

「なにを言ってる。お前ら2人死ぬんだよ」
クロコダイルオルフェノクは2人に攻撃を仕掛けてきた

一方の、海堂

周りにいた、オルフェノクはすべて消えた

「良太郎君。大丈夫？」
真理達が心配そうに駆け寄る

「はい。大丈夫です。それより、一体あれなんですか？」
良太郎の質問に皆はずっこけた

「オルフェノクだよ！知らないのかよ！」
海堂は人間の姿に戻った

「あれ？人間の姿に戻った？」
良太郎は疑問そうに海堂を見る

「そんな、じろじろみんなじゃねえよ！」
海堂は自分をじっとみる良太郎に怒った

「あれは、オルフェノク。人類の進化系よ。」
里奈が説明する

「えっと。じゃあのケースに入ってたのは」
良太郎は、戦っているファイズやデルタを見て

「そう。オルフェノクと戦うもの」
啓太郎が答えた

「（電王とは別にあんなのあったんだ）」
良太郎は心の中で思った

デルタ&ファイズvsクロコダイルオルフェノク

「くそ！どうしてだ」

クロコダイルオルフェノクは焦っている

「分かったか。今のお前じゃ俺達には勝てないんだよ」
巧はケースからファイズショットを取り出す。

そして、コードを入力

ENTER

EXCEED CHARGE

すると、光が、ファイズショットがしてある右腕に集まってくる

「はああ」

ファイズはそのまま拳を付け出しその攻撃により
クロコダイルオルフェノクは消滅した

「終わったな」

巧は変身をとく

「ああ」

続けて、三原も変身をとく
すると、戦いを終えた、巧達のもとの真理や良太郎たちが駆け寄ってくる

「やったね！巧」

真理は嬉しそうに言う

「にしても、お前確か前にこいつ倒したはずだよな」
海堂が言う

「ああ…なのに生き返った」
巧も不思議そうに言う

「まさか。他のオルフェノク達も生き返ったりしないよね？」
啓太郎が恐る恐る言う

「まさか…？ちよつと何？あれ？」

真理が、そんなこと無いと言おうとしたとき複数の影が現れた

「オルフェノクじゃないぞ！あれ！」
海堂が言う

「あれは…」

良太郎はその影を見つめる

「良太郎。知ってるよあれは…」

良太郎が言おうとしたその時

「あれはイメージだよ」

イメージとは反対がわから歩いてきた男

「お前は！北村！生きてたのか！」

巧が大声でいう

「たつ君。後ろ！」

真理は北村の後ろに居る人物を指さす

「久しぶり」

北崎だ

「まあ、今日はただ挨拶にきただけよ」
ロブスターオルフェノクが言う

「だいたい、イメージって何なんだよ！」
啓太郎が聞く

「それは、彼が説明してくれるわ」
ロブスターオルフェノクの後ろにいた人物が出てくる
巧達は彼をしらない、だが良太郎だけは知ってた、
イメージを仕切ってた人物

「カイ……」
良太郎は言う

「久しぶりって気がするよ。俺そういう顔してるだろ？野上良太郎……」
カイは嬉しそうな顔とは、裏腹な顔をして言った。

Episode:11 敵の登場（後書き）

ジエイの口調最後まで直せなくてごめんなさい。
黒人の口調って、見ても分からないんだよね…

カイと良太郎

巧達と村上ら

やっと会わせることが出来た。

感想・誤字脱字などがあつたら教えてください。

Episode:12 会話(前書き)

12話です。

よろしく願いします。

Episode:12 会話

「…どうして、君が生きてるの？カイ？」

良太郎はストレートに質問する

「おれは、特異点だよ。誰かが覚えてるんだよ？俺のこと？」
カイが言う

「特異：点なんだそりゃ？なんだそれ？良太郎？」

巧達一同は疑問に思った

巧は物事を知っている良太郎に質問する

「後で説明するよ」

良太郎は一回、巧達の方を向き

答え再びカイを見た。

「でも、カイ君は、過去を持ってないよね？誰が覚えてたの？」

良太郎はカイに質問する

「それが、分からないんだよね…まあ今日は挨拶だし。てかお前一人で何ができるの？」

何も覚えてないカイ

でも、そんなカイは良太郎に質問する

「できないよ…でも、君の好きなようにはさせないよ」
良太郎は、拳を握り締め言う

「そう言うのがむかつくんだよね…。まあいいけど…」
カイは、そう言うのと、指を「パチン」と鳴らす。

すると周りには、たくさんのイメージが出てきた

「そんだけ言うならこいつら倒してみて」

カイが言うところには、さっきよりイメージが増えていた

「じゃ、バイバイ」

そう言うとカイは姿を消した

残ったのはイメージのみ

「敵が増えた」

啓太郎が驚き指を刺す

「おい。なんなんだ！良太郎」

巧は、その場に立ち尽くしている良太郎に聞く

「…逃げてください」

良太郎が言うと、良太郎はその場を走りだす

すると周りのイメージも良太郎を追いかけた

「巧！良太郎君行っちゃうよ！」

真理が呼び掛ける

「追いかけるぞ」

巧が言う

「そうだね。彼にも事情聞かないといけないし」

三原が言う

そういつと皆は良太郎のあとを追った

一方の良太郎

良太郎は走りまわったが、体力の限界が着ていた

「ヘンシンしないのか？」

イマジンが聞く

良太郎が黙ったままだ

「何とか言ったらどうなんだ」

イマジンが近づいてくるが、

それを払いのけ巧が来た

「良太郎。こつちだ」

巧が良太郎の腕を引っ張り、走り出す

「あつ！そつちは…」

良太郎は言う。

巧と走り続けて、たどり着いた場所は、なんと行き止まり

「お前知ってたなら言えよな！」

巧は良太郎に怒る

「だって、走ってるのに、声掛けたら悪いかな…って」

良太郎はビクビクしながら言う

「たっ君！良太郎君！」

啓太郎が言う

すると、空から電車が出て良太郎と巧の目の前に青い電車が現れる。
後ろには、緑色の電車も接続されている

「何だ！あれ！」
巧が電車を見て驚く

「…デンライナー。それにゼロライナー」
良太郎が、デンライナーを見て言う

「えっ？！何デンライナー？ゼロライナー？どこの電車だよ」
巧が聞く

「デンライナーとゼロライナーは時の列車だよ。」
良太郎が言った時デンライナーとゼロライナーは止まっていた。

「えっと、あれ電車だよね…どこから？」
里奈が驚き不思議そうに聞く

「空からきてたような…」
啓太郎が言う

「普通ありえないだろ」
三原も言う

「だね」
4人は口をそろえて言う。
さすがに、驚きはしたが、口数は減らない。
やはり、自分達もオルフェノクやファイズを見てきたからだろう…

そんな時電車のドアが開いた

Episode:12 会話(後書き)

やっと、投稿できた…。

てか、最近キーボードの打ち込み具合がかなり

悪い…。

どうしてだろ？これってかなり困る…

Episode:13 共闘(前書き)

13話です。

よろしくお願ひします。

「良太郎!!」

リュウタロスが飛び出てきた

良太郎は飛び出してきた、リュウタロスを支えきれずそのまま地面に倒れることになる

「ほら。リュウタ。良太郎死んじゃうよ?」

ウラタロスが出てきて言う。

手には、ウラタロスの武器ウラタロッドを持っている。

そこにはリュウタロスの下敷きになっている良太郎が…

「あれ?良太郎?大丈夫?」

リュウタロスが、すぐに良太郎の上を離れる

「うん…なんとか」

良太郎はそういいながら立ち上がる

「なさけねえな、良太郎」

モモタロスが出てくる

手には、モモソードを持っている

「そうかな?」

良太郎は首をかしげる

「にして久しぶりやな」

キンタロスがキンタロスアックスを持って言う

「にしても、本当に運ないよな」
幸太郎が出てくる。

片手には2個のライダーパスを持っている
そして1個を良太郎に渡す

「一緒に戦おうよ。じいちゃん」
幸太郎が言った

もう、訳がわからない…
巧は思った。

こんなになつたのは、自分がファイズになつた時いらいだろつか…
これが、終わったら良太郎にぜつたいに訳を聴こう

「うん。」

良太郎もうつむく

「モモタロス、行くよ」

良太郎が呼びかける

「おう」

モモタロスが言う

「テディ」

幸太郎が言うとテディが出てきて

「変身」

幸太郎と良太郎は、デンオウベルトにパスタッチして、
そ良太郎はソードフォーム

幸太郎はマチェーテディを持ったストライクフォームに変身。

「皆！行くぜ！」

変身したモモタロスが叫ぶ

「「おう！」」

ウラタロスら、そして幸太郎が言う

数十分後

イマジン軍団は全滅した

「おい、良太郎！」

巧が呼びかける

ソードフォームは変身を解く

「ああ！誰だお前！」

M良太郎が叫ぶ

「誰だ？お前良太郎じゃないな？」

巧は顔をしかめる

「ああ俺は……」

M良太郎が言葉を続けようとしたとき、
突然モモタロスが良太郎から離れた

「いきなり、喧嘩ごしにならないでよ！」
良太郎がそういうと

「悪い！ついで！」

モモタロスが謝る

「良太郎。説明してくれるか。こいつらは何なのか？」
巧が真剣な目で良太郎に聞く

「はい」

良太郎もうつむく
駆け寄ってきた真理たちも見て

「でも、良太郎ここで話すのはやばいじゃない？」
ウラタロスが言う

「そうだね……」

良太郎も考える

「なら。デンライナーで話せばいいだろ。オーナーも認めているし」
侑斗が出ていた

「でも、こんな大人数で乗れるかよ」
モモタロスが文句を言う
そう人数が多すぎる

「なんとかなるだろ」
そついい侑斗は車両の中に戻っていく

「まあ、とりあえず皆のつてください」
良太郎は、電車に上がりながら言う
巧達はその後に続いていき、皆が乗り終えた後、電車は再び出発した

Episode:13 共闘(後書き)

えっと、題名結構迷いました。

そしてこの「共闘」という題名。

絶対また使う機会があるような気がします。

感想や誤字脱字などがあったらお願いします。

Episode:14 電車の中で…(前書き)

少し間が空きましたが、
14話です

ここは、デンライナーの中
ただいま満員状態

「あの…イマジンってなんですか？」
啓太郎が勇気を振り絞って聞く

「イマジンというのは、簡単に言うと、未来を自分のものにしよう
としているものです」
プリンをたべていたオーナーが言う

「そして、それと戦ってきたのが、電王とゼロノスなんです」
オーナーは、続けて言った

「ところで良太郎…得異点ってなんだ？」
巧は先ほど、カイが言った「得異点」が気になっていた

「うーん…なんて言ったらいいのかな？もしイマジンが過去を壊し
ても、
それに影響されない。それが得異点かな？特異点は、過去が壊され
ても
得異点の記憶で修復されるんだ。そして電王に変身できるのは
その得異点と得異点についたイマジンだけなんだ。」
良太郎が言う

「そして、イマジンを抑えられるのは、特異点だけなんだ」
侑斗が付け加える

「憑いたってまるで憑依みたいだね」
啓太郎が笑いながら言う

「いや。イメージは憑依もするよ？」
幸太郎はまじめに答える

「えっ？ そうなの？」
真理がびっくりしたように聞く

「どんなかんじなの？ 見たいな？」
里奈が興味津々で聞く

「何て言ったらいいかな？ 巧さんがさっきみた状態がイメージの憑依状態だよ」

良太郎が言う
巧は納得しているが、真理らは見ていない

そんな中で、巧は、微妙にずれた話を戻す。

「じゃ、お前もあいつと同じ得異点なのか？」
巧が聞くと

「そうです。」
良太郎が頷く

「じゃ、君も？」
啓太郎が幸太郎に対して聞くと

「そつだよ。」

幸太郎が言った

「君も？」

三原は侑斗に聞く

「俺は得異点じゃないけど、ゼロノスに変身している」
侑斗が言う

「あれ二人とは違うんだな？」
巧が聞くと

「まあそういうことだ」

侑斗は、説明をしようか迷ったが、ゼロノスについては聞かなかった。
たので

説明をしなかった。
きつと、巧らは、ゼロノスと電王は同じシステムだと思ったのだら
う。

実際には、かなり異なっているが…

「イマジンって敵よね…あなた達敵だったのに、良太郎君に憑いた
訳？」

真理がイマジン4人に聞くと

「俺はな、イマジンの使命なんてどうでもいいんだよ！戦えればそ
れで十分だ」

モモタロスが言う

「まあ、確かに使命なんてどうでもいいよね。僕達には今があるん
だしさ」

ウラタロスも言う

「せやな」

「そうだね」

前に言った二人のように、キンタロスとリュウタロスが言う

「そついえば、君達名前なんて言うの？」

里奈が聞く

「お前達こそなんていうんだよ！」

モモタロスは自分から名前が言うのが嫌なのか、

里奈達から言うように言うと

「俺は、乾巧。仮面ライダーファイズに変身している」

「俺は三原修二仮面ライダーデルタに変身している」

巧と三原がそれぞれ自己紹介する。

それに続き真理たちもした

「巧さん。ファイズやデルタはどういう人達に変身できるんですか？」

良太郎が聞くと

「ファイズに変身できるのはオルフェノクとそのオルフェノクの記号を、

埋められた者だけだ」

巧が言うと

「ええ！！じゃ巧さんはオルフェノクなんですか？」

良太郎が驚きながら聞く

もちろん他の皆も驚いてる

「そっだ」

巧が言う

「じゃ、三原さんも？」

良太郎が三原に顔を向けると

「俺は、オルフェノクの記号を埋められている。

まあ、もっともデルタには関係ないがな……」

三原が言う

「オルフェノクの記号？」

良太郎はイマイチ分かっていない

「良太郎君そこら辺は、難しい事なのよ。気にしないで
真理が言う

「分かりました」

良太郎が言った

「じゃ、私達の自己紹介は終わったし君達はなんて言うの？
真理が聞くと

「俺はモモタロスよろしくな」

「僕はウラタロス。僕に釣られて見ない？」

ウラタロスはそう言って真理を口説こうとするが

「ふん！」

真理はそういうと

「やっぱこの姿じゃ駄目か…」

ウラタロスは声を低く言う

「俺は、キンタロスや。よろしくな」

キンタロスが言う

「僕は、リュウタロス仲良くしてね」

リュウタロスが言う

「うん仲よ」答えは聞かないけど」

啓太郎が言おうとすると、リュウタロスが啓太郎の声を遮って言う

「しかし、さっき見たイメージと全然違うわね」

里奈が言う

「それはそうでしょ。この時代にやってきたイメージは、契約者。つまり彼らで言うところのじいちゃんのイメージなんだからさ」

幸太郎が言う

「あのさ…じいちゃんってだれ？」

啓太郎が聞くと

「えっ？じいちゃん」

幸太郎が指差す先には良太郎がいて

「なに言ってるの。2人とも年そんなにかわらないでしょ？」
里奈が笑いながら言う

「だって、この時代じゃなくて、俺は未来のじいちゃんの孫なの！」
幸太郎が言う

「「ええっ!!」」
巧らは驚いた

「この電車はそんなことも出来るのか…」
巧は驚いていた

「そういえば、君名前聞いてなかったけど、なんていうの？」
里奈が聞くと

「……」
幸太郎は黙っている

「おい。ここは未来じゃねえぞ。だから大丈夫だって」
モモタロスが言う

「野上幸太郎だよ」
幸太郎は恥かしながら言う

「そうなんだ。」
里奈が言う

そんなとき巧はふと思った

「しかし、あれが良太郎のイメージか…何か、あんまりセンスがい

いとはいえないな…

あいつらの名前も含めて…」

巧が思ったことは全員が思ってた事だった。

「あの… オーナーなんでこんな事態になったのですか？」

良太郎が聞くと

「それは彼らも含めて話をしましょう… ナオミくん、ハナくん入ってきてください」

オーナーが言つとドアが開き、そこには、良太郎が知ってる顔
巧達が知ってる顔の人が立っていた

Episode:14 電車の中で…(後書き)

やっと、書けた…最近いろいろ忙しいから

投票がかなり遅くなった…

次はなるべく早く投稿したいけどどうなるか…

感想・誤字脱字などがあつたら教えてください。

Episode:15 電車中での再会(前書き)

15話です。

よろしくお願ひします

Episode:15 電車の中での再会

ミルクディッパー

「良ちゃん。遅いわね」

愛理がいう

そうあれから30分たったのだ

すると、ミルクディッパーのドアがあく

「愛理さん〜かってきましたよ」

尾崎が言う

続けて三浦が入ってくる

荷物を机に置く2人

「しかし、これ一体何につかうんですか？」

三浦がたずねる

「もうすぐ、両親の命日なんです」

愛理が言う。

その顔には、すこし寂しさが、混ざっていた

その時、またドアが開いた

「愛ちゃん。久しぶりね。良ちゃんは元気？」

一方の、デンライナー

「お前は、草加！それに木馬！長田」

巧が言う。

三人は、オルフェノクの戦いで死んだのだった

「お前ら…どうして…」

巧が言う

「分からない…気づいたら生き返ってたんだ…」

木場が言う

「そんな、俺らの前にこの電車が現れたんだ」

草加があたりを見回して言う

「草加君…」

真理が草加を見つめる

「真理…久しぶりだな」

草加は笑みを浮かべている

「啓太郎さん…また会えました」

長田は泣きながら言う

「長田さん。良かった…」

啓太郎は、長田以上に泣いている

「乾君。また君に会えるとは、思わなかったよ」
木場が言う

「ああ。そうだな」

乾がうつむく

「良太郎。久しぶりね」

ハナが言う。

しかし、彼女は変わっていた

「ハナさん。その姿」

良太郎は驚いていた。

そうハナは大人の姿に戻っていたのだ

「ここに来るとき、いきなりもどつたのよ」

ハナが言う

「そうだぜこいつ、いきなり子供から…大人に戻ったんだぜ」

モモタロスは、まるでまだハナが子供みたいに扱う

「いつまでも子供扱いしない！」

ハナはそういうと、モモタロスに溝打ちを食らわす

それを食らったモモタロスは苦しみ

そのまま地面に転がった

「何しやがる…この」

モモタロスが文句を言おうとした時、

ハナの拳が、モモタロスの頬を掠れる。

拳には威圧感が漂っている

そして、巧達のハナの第一印象は

「怖い」だった

「真理より怖そうだ」

巧が思わず言うつと

「何よ！それ！どつという事！」

真理が怒り出す

モモタロスとハナ、そして巧と真理の言い争いが始まった。

「えつと、4人もやめようよ。」

良太郎がオロオロしながら言うつと

「「良太郎はだまつてる（だまつてつて）」

4人に一斉に言われてしまった良太郎

「4人ともこれ以上さわぐと乗車拒否にしますよ…いいのですか？」
オーナーがポケからカードを取り出そうとすると、

ハナとモモタロスは乗車拒否の意味を知っているからすぐに喧嘩をやめた

しかし、真理と巧は分かってない

「2人とも早くやめたほうがいいよ」

ウラタロスが冷静に言う

「それどついう事？」

真理が尋ねると

「この電車から放り出されて、砂の中永遠に歩き回ることになるよ…」

ウラタロスが言ってる意味が分かったのか、2人も喧嘩をやめた

「あの…オーナーなんでハナさんが大人に？」

喧嘩が収まった中、良太郎がオーナーに聞くと、

「それは…あれを見てください…」

オーナーが指差す先にはあるものが広がっていた

Episode:15 電車の中での再会(後書き)

あけまして、おめでとうございます。
これからもよろしく願います。

ついに、題名がだんだん前の題名と似てきてしまった…。どうしよう…

今回は、とりあえず主役メンバーはこれでそろいました。

次は、ハナが大人になった原因と、木馬たちが復活した理由意ついでふれたいと思います。

Episode:16 電車の中での話し合い(前書き)

16話です。

よろしくお願ひします

Episode:16 電車の中での話し合い

オーナーが指差す先には、未来につながるはずの、線路がなくなっていた。

「オーナー…これは一体どういうことですか？まさか…」

良太郎は、ある事が頭を過った。そうそれは、「時間の消滅」

「いえ、それとは違います…」

オーナーは言う

「まあ、似たようなものですがね…」

オーナーがそう言うが

それは心の中で思った事なので誰も聞こえなかった

「まず、オルフェノクとイマジンが協力している事で変化が起きた。それに

一番の原因はカイが生きていた事」

オーナーが言う

「でも…なんでカイが生きてるんですか…だってあの時彼は…砂になっ
て消えたはず」

良太郎は、あの時の事を思い出す

そうカイが砂になって消滅した

「誰かが、カイを覚えてたんでしょう…」

オーナーが顔を濁らせて言う

自分達が知らない誰かが…

「一体誰が…」

良太郎は考え込む

「おい、お前が考えることじゃないだろ。戦うのは俺達なんだからな。」

草加が言う

どうやら、良太郎は戦う戦士には見えないようだ

「じいちゃん…見学人って思われてない？」

幸太郎が思わず言う

「草加君。彼もイマジンって言う怪物と戦ってきたのよ。真理が言う

「そんなはずないだろ。あの2人なら分かるけどこいつは草加が、幸太郎と侑斗を指差す

「だつてさ。野上」

侑斗は、笑いながら言う

「じいちゃんさ…もう少し体鍛えたら？」
幸太郎も笑っていた

「2人とも」

良太郎は、うな垂れながら言う

ピッピピッピ

良太郎の携帯電話がなる

どうやら電話の相手は愛理のようだ

「ごめん。僕そろそろ戻らないと。ナオミさん停車時間はいつ？」

「もうすぐです」

ナオミが時間を言う。

もうすぐ停車時間だ。

良太郎は急いで電車を降りた。

無事に降りられたかは言うまでも無いが…

「おい。お前からあいつの何処がいいんだ？」

海堂が思わず聞く

「良太郎はね、運もないし。体力もないんだ」

リュウタロスと言う

しかしそれは良い所ではない。

悪いところだ

「けどね…」

リュウタロスは続ける

「誰にも負けない強い心を持つてる」

ウラタロスがリュウタロスが言おうとした言葉を言った

「強い心？」

海堂の隣にいた啓太郎が思わず復唱する

「そや…そして強い信念」

キンタロスと言う

「お前の言う用に良太郎は運もないし。弱いけどな

あいつ、良太郎は誰よりも優しく強い心を持っている。
俺達はそんなあいつに惹かれたのかもな」

モモタロスが言う

そんなモモタロスの言葉に3人は納得していた

「弱いけど…優しくして強い心か…」

草加は言葉を漏らす

「それよりさ、幸太郎お前、これからどうするんだ？」
モモタロスが思わず聞く

「どうするって？」

幸太郎が聞くと

「住むところだよ！まさか電ライナーで過ごすのか？」
モモタロスが聞くと

「もう考えてるよ」

幸太郎が答える。

皆の前では、こういうが、実際には、
住む場所なんて考えていなかったのだ。

Episode:16 電車の中での話し合い(後書き)

タイトルがだんだん似たり寄ったりになってるのは、
私の気のせいでしょうか…

感想・誤字脱字などがあつたらよろしくお願いします。

Episode:17 おばあちゃん(前書き)

17話です

誤字脱字などが多いかもせいれませんが
宜しく願います。

Episode:17 おばあちゃん

そう電車は先ほど止まったばかり。

ミルクディッパー

「遅いわね良ちゃん」

愛理は心配そうに言う

「きつともうすぐ帰って来るわよ」

さきほど入ってきた女性だ

すると、ドアが開いて良太郎が入ってきた

「ただいま。」

良太郎が帰ってくる

「お帰り。良ちゃん」

女性が言う

その女性に良太郎は驚いた

「おばあちゃん?! どうしてここに?」

良太郎は驚いている

いつもはいないおばあちゃんが此処に居るのだから...

「ほら、もうすぐあれじゃない...だから来たのよ。去年も一昨年も行けなかったし...

今年は、久々に3人で行くと思って…」
おばあちゃんが言う

「あっ…そうだね」

良太郎はそういい、家に飾ってある、カレンダーを見る。そこには17日に がつけられていた

「もうすぐ…お母さんとお父さんの命日だったね」

良太郎がしんみり言う。

そう、去年、一昨年と命日に墓参りにはいけてないのだ。

「…おばあちゃんこれからどうする？」

良太郎の顔は一瞬顔が、少し暗かった

すぐに、顔を明るくしておばあちゃんに聞く

「そうね、今日は少し話したかっただけなの。当日待ち合わせて行きましよう」

おばあちゃんはそう言い、出て行った

「どうしたの？良ちゃん？暗い顔をして？」

愛理は一瞬顔が暗くなった良太郎の事をしてたのが気になっていた

「なんでもないよ。姉さん」

良太郎はそういうと近くに座った

「そう…何かあったら言ってね。」

愛理はそういうと料理を始めていた

「もうそぐなのか…」

良太郎はふと思った

いつもこの時期になると両親の事を思い出してしまう。
幼い頃に死んでしまった両親だが、
去年、牙王との戦いの帰りに、オーナーの計らいで一瞬だが見るこ
とができた。

「はい。良ちゃん」

愛理が言う。

目の前には良太郎のために作られる健康食が置かれている

「そういえば、良ちゃんどうしたの帰りが遅くなったけど？」

愛理が、何分も時間がかかっていた良太郎に理由を聞く

「友達にあつてたんだ。そして話してたよ」

良太郎が、頑張つて料理を食べながら答える

「そうなの」

愛理は笑顔で言う

デンライナー

「住む場所どうしようか？」

幸太郎は考えている

「取り合えず一回降りて探したらいいんじゃないの？」
ハナが言う

「そだね。次の停車時間で降りるよ」

幸太郎はそういうと椅子に座ってくつろいでる

「お前たちはどうするんだ？」
侑斗が長田・草加・木馬に聞く

「どうしよう…海堂さん今もあの家に住んでるの？」
長田は海堂に聞く

「今は、別のところにすんでる」
海堂が言う

どうやら一人で住むには広すぎる部屋だったらしい

「まあ、急ぐことないよ。時間はまだあるんだしさ」
幸太郎は言う

「あれ？幸太郎そういえばさ？テディどこ行ったの？」
ウラタロスが聞く

確かにテディが居ない。よく見ればデネブも居ない

「あいつらなゼロライナーに居る。ここは人が多すぎるからな」
侑斗が言う

ゼロライナー

「暇ですね」
テディが言う

「だな。俺たちも行かないか？デンライナーに…」
デネブが動き出しながら言う
落ち着かない様子だ

「でも、きつともうすぐ帰ってくるはずですよ。此処で待ってるて
言われてますし」

テディは、そう言いながらかなり落ち着いている

Episode:17 おばあちゃん(後書き)

今までの、少し訂正や付け加えをしてみました
付け加えたのに誤字脱字がない事を祈りたいです。

劇中で名前のみ登場していた「おばあちゃん」を出してみました。

感想・誤字脱字などがあつたら宜しくお願いします。

Episode:18 久々のハナ(前書き)

18話です

宜しく願います

Episode:18 久々の八ナ

研究所

「これからどうするのさ？」

北崎が言う

何もしてないため少し飽きてきたようだ

「確かに…これからどうするつもりです？」

村上是尋ねる

「そうね…今王を復活させようとしても、また彼らに邪魔されるだけ。

まずは彼らを倒してからそれから王を復活させましょう」

冴子が言う

「そうですね」

村上が冴子の案に賛成した

「そういえば。彼は？」

北崎はあたりを見回す。

彼とはカイの事だ。

「彼ならあそこに」

冴子が指差す先には地べたに座っているカイが居る

「そういえば、何で俺生き返ったんだっけ？」

カイは疑問に思っている

「何言ってるの？さっき自分で誰かが覚えてたからって、言ってるじゃない？」

北崎が言う

すると、少し考えた顔をした後

「そういえば、そうだったね」

カイがそういうと立ち上がる

「あれ？何処行くの？」

北崎が聞く

どうやら北崎は、カイに興味があるようだ

「少し、風に当たってくるだけだよ」

そういいながらカイは外へ歩いていく

…誰かが覚えている

「一体誰が覚えてるんだ？俺知りたいそんな気がするよ」

カイがそういうが、回りは、誰も居ない。

その声だけが、周りには響いてた

ミルクディッパ―

「姉さん。今日はあんまり人こないね」

良太郎は言う

いつももならたくさんいる客今は一人も居ない

「そうね。どうしてかしら？」

愛理も不思議に思う

そんな時店のドアが開いた

「愛理さん。久しぶり」
ハナが入ってきた

「あらハナさん。久しぶりね？コハナちゃんは？」
愛理が笑顔で言う

「えっと・コハナちゃんは…」
ハナは返答に困っている
そうコハナは小さくなった自分なだから

「姉さんコハナちゃんはね…そう、今両親と旅行中だよ」
良太郎は思わず言う
無論、ハナに少し文句を言われてしまったが
愛理は納得したらしい

「にしても、全然客がないけどさどうして？」
ハナが不思議に思う

「そうなんだよなんでだろ？」
良太郎が言う

「なに言ってるの？ドアcloseになってるからだよ。」
幸太郎が言う
言われて外を見に行ってみるとcloseのままになっていた

「あら？本当だわ」
愛理が言う

「直しとく？」

良太郎がcloseになっている掛け軸をopenに直そうとするが

「いいわよ。今日はゆっくりしましょう」

「そういえばそちらの方は？」

愛理が言つと近くに居た幸太郎に気がつく

「：幸太郎です」

幸太郎がお辞儀する

「まあ、良ちゃんにてるわね」

愛理がそついうと良太郎をみる

「そつだね」

良太郎が苦笑をする

似てるも何も良太郎が今よりも未来につけた名前だから当然だ

「あつ、幸太郎君居た。探したよ。それに八ナさんこっちに来てたんだ」

遠くから声がする木馬だ

「あつ木場さん」

良太郎が言つ

そして木場も良太郎に気づいた

「あつ、良太郎君」

「どうしたの？乾さん達とは一緒じゃないの？」

良太郎が不思議に思っている

「それは……」

木場は何て言えばいいか分からなかった。
見かねた良太郎は、

「まあ、中で話そうよ。立ち話もなんだしさ、中に入ってよ」

「そうね。さあ、3人とも中に入って」

良太郎が言っていると、愛理がドアを開ける
愛理に言われて3人は中に入っていく。

Episode:18 久々のハナ（後書き）

前々のも含めて色々誤字脱字などを含めて見直しましたが、結構見
つかりました。
気をつけないと…

誤字脱字・感想などがあつたらお願いします

Episode:19 住居(前書き)

久々に書けました。
それではどうぞ！

誤字脱字注意！

Episode:19 住居

ミルクディッパー

3人の前にはコーヒーが入れられている

「じゃ、木場さんも幸太郎も住む家を探しているんだ」
良太郎は言う

だがふと思ったことがあった。

木場さんとはかく、幸太郎はこの時代で家を探すのは無理だろう…
幸太郎はこの時代では生まれていないのだから…

「あれ？でも木場さん乾さんの家は駄目だったんですか？」
良太郎はふと思う

巧達なら別に快く一緒に住むのを許してくれそうだがと思うが…

「それがね…」

木場はついさっきのこと思い出す
すべては啓太郎のこの一言から始まった

デンライナー

さきほどからずっと住む場所を考えている3人。
そんな3人とは変わってくつろいでいる幸太郎
そんな時啓太郎は声を上げた

「皆うちに住めばいいじゃない！」
えっ…皆はびっくりしていた
時が一瞬止まった気がした

「ねえ啓太郎君だっけ？3人も住めるほど君の家はスペースあるのかな？」

ウラタロスが聞くと啓太郎は考える仕草をしている
そこで声を上げたのは巧だ

「3人は無理だろ！せめて2人ぐらいまでだろ」

「そうね。1人には悪いけど、うちそんなに広くないし……」
真理が悪そうに言う

「それじゃ……じゃんけんして勝った2人がうちに来るってのはどうかな？」

啓太郎は少し落ち込んだ顔をした

その言葉で3人つまり長田・木場・草加の3人だ。

3人はジャンケン……ポンっ

結果は……

右らグー・パー・パー。

長田・木場・草加だ。つまり負けたのは長田

「あゝ負けちゃった」

長田は残念そうに言う

「長田さん。啓太郎君の家行きたかった？」

木場がたずねると

「でも……ジャンケンで負けちゃったし……しかたないですよ」

長田が言う

「じゃ、僕と交換しようよ。まだ言っていない訳だしさ」

木場の提案に長田は「申し訳ない」と言うが

「啓太郎君とあの時から会ってない訳だし話たいだろ？」

「…ありがとうございます」

長田が礼を言う

そんなやりとりを見ていた幸太郎

「優しいんだね」

幸太郎は思わず思ったことを言う

「そんな事ないよ」

「そう？それよりさ。住む家なんだけど一緒に探さない？」

「いいのかい？」

木場が聞くと

「いいよ。2人のほうが探しやすいしね」

幸太郎が言ったことに賛成する木場

こうして2人は住む家を探す事になった

しかし、家なんてそう簡単に見つかる筈もなく
現在に至る訳だ。

「…そうだったんだ」

良太郎が静かに言う

「でもさ〜どうするの家」

幸太郎はコーヒーを一口飲む

「そうだね…」

木場が困ったようにコーヒーを飲む
そんな2人を見た良太郎は「ちよっと、待ってって」
すると店の奥へと入っていく。
どうやら奥には愛理がいるようだ…

「あらっ？話はもう終わったの？」

そっぴい顔を覗かせる愛理

「ちつよと相談があるんだ」

良太郎が少しえんりゅがちに言う

「何？」

愛理は良太郎の相談を心良く受け入れる

「あのね…」

良太郎は、話し始める

会話はすぐ済んだのか良太郎はすぐ幸太郎達がいる所に戻ってきた。

「2人ともさうちに住まない？」

良太郎が言う

そんな良太郎の言葉に2人は目を点にして驚いていた

「「えつつつ!!??」」

見事に声が重なる2人。

その声は店内に響いていた。

Episode:19 住居（後書き）

この小説じつはもつと早く投稿できたのですが、途中書いて保存しようとしたら、インターネットとの接続が遮断されていて、書いたの全部パーになってしまったため。書くの遅くなってしまうた

てか。こんかいハナを全く出せなかった。

感想誤字脱字などがある方はお願いします。

Episode:20 住居(2) (前書き)

風邪を引いてしまった・・・

もう平気だけどね！

それではどござ！

「そんなの悪いよ!じいちゃん」

「そうだよだいたい許可だったて…」

幸太郎と木場はそれはと断るが

「もう姉さんに許可は取っている平気だよ」

さつきに話はそれだったのかと呆れる2人

もう愛理には許可をとっていると言つことは断る事はできないのか…

「それにさ2人も今(この時代)のお金持ってる?」

良太郎の言葉に2人は「へっ?」と驚いた顔をしている

「お礼つてこの事じゃないの?」

幸太郎が取り出す

しかしそれは当然ながら今の時代のものじゃない

「幸太郎…これはだめだよ」

良太郎は始めて見るお札に興味深々だったが否定した

「へっ時代も変わったもんだね」

木場も財布から旧札を取り出す

「そうですね。まあ旧札でも一応買物などはできますがさすがに

…」

良太郎が言う

「良太郎君?その新札ってどういうの?」

木場が聞くと、良太郎は財布からお金を取り出す
2人とも初めてみるお札に興味があつてしばらくみている

「だからさ2人とも働いてお金あつめようよ!」

良太郎の言葉に2人は反応的に俯いたがそのあと疑問に思った

「あの働くつてどこで?」

木場が恐る恐る聞くと

「ここだよ」

良太郎が笑顔で言う

そう2人の働く場所は此処ミルクディッパ―

「じゃ 住む場所は?」

幸太郎が聞くと

「僕の部屋だよ」

「えっ!? じいちゃんは何処で寝るの?」

幸太郎が聞くと

「僕はもう一個住んでる部屋があるしそこでいいよ

良太郎が言う

いくら言ってもらちがあかない

そう思つて2人は観念した

こうして2人の泊まる場所が決まった

「時の電車あれさえあればあの時間を変えられる」

男の人の声が聞こえていた

「あのときの事がなかったらこんな事にはならなかった」
一人の女の人が言う

思っていることが違う2人だが
2人のオモイガスベテヲカエル

「で・・・ここは？」
木場が思わず言う

「ここが良ちゃんの部屋ですよ」
愛理が説明する

「いやそれは、わかるよ」
幸太郎が言う

それもそうだろう、部屋の掛け軸には大きな字で「良太郎の部屋」
と書かれている
問題は部屋の中だ部屋の風景とはぜんぜん合わないものが普通に置
かれている
イマジンの名前のセンスも無ければ、部屋の風景のセンスもぜんぜ
ん無いのだろうか。

「あのじいちゃんは？」
幸太郎が聞くと

「じいちゃん？」
愛理は首を傾げる

幸太郎は慌てたように

「いや・・・その良太郎さんは何処に？」

幸太郎は言う

まだ自分は生まれてなかった！

違和感がありながら言う

「良ちゃんなら家に帰ったわよ。と言っても此処からそう離れてないけどね」

愛理が言うそう・・・良太郎が一人で住んでいる家は案外近くにあるらしい・・・

「まあ2人とも家が見つかるまでゆっくりして行ってね」
愛理が部屋から出て行く

「さて・・・でもこのカードの日付の日に一体なにが・・・」

カードに書かれた1月17日の意味を知るのはそう遠くない

デンライナー

「あつ！お帰りなさい」

ナオミが扉から入ってくる人物に気づく
さきまでミルクディッパ―に居たハナだ

「で決まったの？幸太郎の住む家？」

ウラタロスが聞くと

「良太郎の家に住む事にしたみたいよ・・・あれまだテディはいないの？」

ハナがさっきあった事の経緯を話しているときにテディが居ないのに気づく

「そやな・・・まだおデブのところにいるのか？」
キントロスが言う
皆がそのままテディの話をしていると

「あの〜話終わりましたか？」
突然テディがやってくる
皆突然やってきたテディにビックリしていた…

Episode:20 住居(2) (後書き)

やっと一区切りできました。

結構時間かかった…

ここまで来るの…

このままゆっくり頑張っていくことにしました
いつ終わるかな？

Episode:21 1月11日 前編(前書き)

何か、最近投票間隔が開きすぎ...

それではどうぞ！

Episode:21 1月11日 前編

1月11日

昼前

ミルクディッパー

「それにしても…遅いわね」
愛理が時計を見ながら言う

「まだ家にいるんじゃないですか？」
木場が言う

「きつと来るから心配ないよ」
幸太郎も言う

実はさつきから良太郎をまっている3人
もう朝をとづくに過ぎていつもなら着ている時間なのに今日はまっ
たくなのだ
そもそもいつも来る時間がまだらなのだが…

「そうね…店開けましょう」
そういミルクディッパーは開店する

「ここは？」

良太郎があたりを見回す

そこは崩壊しているビルかアパートだろうかもう原型などとどめていない

あたりも砂塵でなにも見えない…

ただ見えるのは、一人の影が大きな声で叫んでいる姿。

その先には姿が見えない誰かが居る

しかしそれが誰なのかも分からない…

自分はそれを確かめようと先に進む…

しかしそこでまぶしい光が入ってくる

「また…この夢…」

良太郎は目が覚める

「なんでいつも此処までなんだろ…最近この夢ばかりみるな…」

良太郎は先程までみていた夢を思い出す

「あれは一体誰…えっ…もうこんな時間！」

良太郎が叫んでいた顔の人物を必死に探ろうと夢の中を思い出そうとしたとき、

時計に目が行った。時間はもう世間で言う昼過ぎだった

「早く行かないと…」

良太郎は急いで店に向かう

西洋洗濯舗 菊池

「なんかいいね！こういうの」

啓太郎がうれしそうに言う

「そうだな…でもあいつ住む家見つかったのか？」

巧が別れた木場の事を心配する

「大丈夫だろきつと」

草加はあまり興味はないようだ

「あつ！真理さん私手伝いますよ」

長田が奥のほうで家事をしている真理に気づく

しかし、真理は一応客だからと断る

でも長田は一応済ませてもらっているから何かやらないと気が済まない！

「分かった！じゃこれお願いできる？」

長田の熱意におされ真理は料理運びを頼む。

言い忘れたが今は昼飯時だったのだ

「でも…こんなのでみんなと再会出来て良かったな」

巧が思ったことを言う。

もう気づいたら5年ぐらい経っただろうか…

会えないと思っていた仲間とこんな感じで再会できたのだから…

「まあ、闘いも起きたけどね」

真理が言う。

それは生き返ってしまったラッキークローバのメンバー。

また倒すとしても訳解なのは確かだろう…

「また皆で力を合わせて戦おうな」

巧の言葉に皆が俯いたと思われたが、一人だけ違った…

そう草加だけが…

「皆出など必要ない…俺が倒してやる…」

草加は一人心に誓っていた

ミルクディッパ―

「それにしても…客多いな」

幸太郎はあたりを見回す

そこには愛理目当ての客だがいつもと少し違っていた。
なぜか彼らの視線が自分たちに向いているのだ

「あの2人は誰だ？」

一人の客が言う

「知らない…まさか愛理さんの!？」

また客が言う

「そんなはずない…」

「じゃ誰だよあの2人は！」

客達の声は完全に2人に聞こえている

これでは木場と幸太郎も働きにくいだろう…

しかし肝心の愛理はコーヒ―を入れているので
話かけるのは申し訳たない。

「ごめん!遅れた!」

良太郎が慌てて店に入ってくる

「良ちゃん!どうしたの？」

良太郎が入ってきた事で慌てて出向く愛理

「ごめん…少し寝坊しちゃった…」

「少しじゃないだろ！だいたいじい…良太郎さんがいないから大変だったんだよ」

不意に幸太郎が言う

そこで良太郎が、幸太郎が自分の事を「良太郎さん」と言ったのが気になったが

そこは少しおいとこつ…

「ところで愛理さんそちらの2人は…」

さっきまで文句を言っていた客の一人が言う

「あつ良ちゃんの友達ですよ…今此処に住み込みで働いて貰っているんです」

愛理は言う

客の男たちは良太郎の友達という言葉で安心したのか男たちの客がもう

幸太郎と木場に向かうことは無かった。

「幸太郎…さん付けはないんじゃない…」

「愛理さんの前だけだよ」

幸太郎は良太郎の苦笑いの質問に当然のように答えた

「あの…ちよつと買い物頼んでもいいですか？」

愛理が申し訳なさそうに木場に頼む

もちろんそれを木場は断らずに買い物物のリストを書かれた紙を持って出て行った

数十分後木場は荷物を抱えて帰ってきた。

Episode: 21 1月11日 前編(後書き)

木場が帰りが早いのはもちろん不幸じゃないから！
良太郎や幸太郎ならそう早く帰れないでしょう…

タイトル、頭に思い浮かばなくなってきたので、
しばらくこれで通します…

感想・誤字脱字などがあつたらお願いします。

Episode:22 1月11日 後編(前書き)

最近忙しくて…

遅れてすいません

誤字脱字などあるかもしれませんが
宜しく願います

「木場さん。有難うございます」
愛理は木場から荷物を受け取る

「早かったね。木場さん。」

「すぐ近くだったからね」

荷物を運びながら聞く良太郎に木場は答える
するとカレンダーに書かれた が書かれた17が目にかかる
それが気になったのか…

「良太郎君。17日って何かあるの？」

木場が質問する。

そしてその答えを幸太郎も真剣に聞く

「大事な日…両親の命日なんだ」

良太郎は静かに悲しそうに言う

「まさか…」

幸太郎は17日と書かれたライダーパスを思い出す
木場もおおまかな話を聞いていたので、自然と顔の表情が変化して
いる

「…ひよつとしたら、あのライダーパスの日付はじいちゃんに
あるのかも…」

幸太郎はふと思った。

この会話は、デンライナーに居るイマジン達にも聞こえていた

デンライナー

「今の話本当かよ」
モモタロスは言う

「らしいね……」
ウラタロスも冷静に言う

「てなると、イメージの契約者となる人物が居るとしたら良太郎の知り合いか？」
キンタロスは自分の意見を言う

「誰だろうね〜」
リュウタロスは絵を描きながら言う

「とにかく…契約者になり得る人物は探さないとね…」
ウラタロスの言葉に皆頷くのであった。

車に乗った2人の人物…啓太郎と巧だ

「今日の配達もやっと終わったね」
啓太郎が言う
後ろの席には空になった箱がある

「啓太郎…やっぱりこれだけ事やってるんだ。もう少し値段上げたほうがいいと…」
巧は言う。

そう啓太郎の店は安い料金でコストは大きいのであった
そのため赤字なんて毎回なので黒字になった事なんて一度もない

「駄目だよ！ たつくん！ … お客様のためにもこのままで行かないと
ね」

啓太郎の言った事に巧は駄目だなと思った。

車は来た道を戻り家に戻っていく

そんな一瞬車はある人物の横を通過する。

時計を見つめるある人物を…

ミルクデイツパー

「そういえば、幸太郎… パス持ってこっちに来たの？」

良太郎は聞く

「そうだよ。それでオーナーの計らいでその数日前に来たって訳」

幸太郎は説明する

しかし、良太郎から思わぬ言葉が飛び出す

「それじゃ… そのパスの日付っていつなの？」

良太郎の言葉に幸太郎は答えづらくなった

それもそのはずでパスの日付は、良太郎の両親がなくなった日

「それは…」

幸太郎は言葉に詰まる

そんな時木場が助け舟を出した

「良太郎君… 今はいいじゃないの？」

木場が言う

「でも、それまでに調べないと…」
良太郎は必死に言う

「まだ先なんだから…ね。それに焦っても情報は出てこないよ」
木場の言葉に納得したのか良太郎は頷いた

ゼロライナー

「デネブ！次のもつてこい！」

侑斗は必死にページを捲る

しかし目的の物は見つからないのか、本は次々と積みまれていく

「侑斗！すこし休まないか」

デネブはそっくりいながら簡単な食事を持ってきた

それを見て侑斗は荷物を隅によせる

あいたスペースにデネブは食事をのせる

「お前…しいたけ入れてないだろうな。」

侑斗が聞くとデネブはそわそわし始めた

そのデネブの様子を見て侑斗は料理をじっくり見る

すると料理の中には細かく微塵切りされていたしいたけが入っていた

「デネーブ」

そっくりい侑斗はデネブにプロレス技を掛け始める

一方的に技をかけられているデネブ。

その時技を掛けられていた腕が机にぶつかり上に詰まっていた本は
下に散乱してしまった

「侑斗…どうしよう」

「とにかく片付けるぞ」

オロオロするデネブに侑斗は散らかった本を片付け始める。

…何処か

カイは相変わらず手帳を探っている

そして捲っていた手はある日付を書かれた所で止まった

「っはは…そういう事ね…こういうのは本人に聞いてみたほうがいいって気がするよ」

カイは笑い出す。

そうその日付は、ある2つの重大な事件が起きた日

Episode:22 1月11日 後編(後書き)

学校の試験があるから多分当分これないと思う…

あともう一つ小説始めると思う…

ライダー系じゃないけど

一時期某小説サイトで書いたのを加筆・修正のをのせたいと思います。

Episode: 23 1月13日 疑問 (1) (前書き)

誤字脱字などが多いかもしれません。が宜しく願います。

日付は過ぎていく…

1月13日

「ねえ侑斗…このことは野上に言うのか…」

頭の中にはデネブのオロオロした声が響いている

「…それは野上に聞いてだ…知らないなら知らないほうがいいかな。

この内容は…」

侑斗の手に握られている一冊の本

「あつ侑斗さん」

店に入ってきた侑斗に気づいた幸太郎。

侑斗は良太郎を探すためあたりを見回すがそこには良太郎はいない

「野上の奴はいないのか？」

侑斗は幸太郎に聞く

「えっ？じいちゃんなら木場さんと一緒に買い物にいったよ」

幸太郎は言う。その言葉に俯く。そのとき幸太郎は侑斗の手にあった本に気がつく

「その本は？」

「これは少し前にゼロライナーで見つけたんだ。見てみる」
侑斗は本を幸太郎に渡す。

それを1ページづつめくる幸太郎。その手はあるページでとまる。
そのページを見て顔を侑斗に向ける

「そつだ…そのことを野上に聞くために此処に来たんだが…」
侑斗は近くにあつたいすに座る

「とりあえず、じいちゃんが戻って来るまで何か飲んでる？」
幸太郎はメニューを差し出す

「…じゃ…水でいい」
侑斗は言う

そんなときドアが開かれる

「…きゃああ！泥棒！！愛理ちゃんは？良ちゃんは？」
入ってきて言われた第一声

「愛理さんと良太郎さんは今出かけてますよ。それと泥棒じゃないよ。アルバイトだよ」

泥棒といわれ少しいらつときた幸太郎だったがそこは少し我慢して
言った

「あんたは？野上の知り合いか？」
侑斗が聞く

「私は野上…愛理ちゃんと良ちゃんのおばあちゃんよ」
おばあちゃんは言う。彼女の返答に一番驚いたのが幸太郎だった。

それもそのはず、彼がおばあちゃんに会うのは初めてなのだから…

「野上のおばあちゃんか…」

侑斗とが嘆く

するとおばあちゃんが

「2人は？今日17日の件で話があるって言ったのに…」

おばあちゃんか少しがっかりしたように言う。

17日とは良太郎と愛理の親の命日だ

「あの…こんなこと聞くの失礼だと思うんですけど…17日って良太郎さんの親の命日ですよね？」

幸太郎は恐る恐る聞く

おばあちゃんは彼の言葉に俯く

「じゃ…迷惑かもしれないけど一つだけ聞いていいか？その野上の両親がいなくなった当時

野上は何処にいた？」

侑斗が聞くと

「良ちゃんは…その時熱を出して家にいた筈よ…それがどうしたの？」

おばあちゃんが思いだすかのように言う

「そうか…2人が帰ってくるまで何か飲みますか？」

幸太郎が聞くとおばあちゃんはコーヒードと頼む

それを準備し始める幸太郎に近寄る侑斗が幸太郎のほうに向かっていく

それに気づいた幸太郎は…

「どづいつ事？」

「俺にも分からん・・・ここに書かれた事と良太郎のおばあちゃんが言った事どちらが真実なのか・・・」

幸太郎の質問に侑斗も顔を濁す。

まさかおばあちゃんがあんな事を言うなんて思いもよらなかった

「あとで愛理さんにも聞いた方がいいかもね・・・」

幸太郎が言った事に侑斗も俯いてた

一方の良太郎・・・

「（ちよつとリュウタロス！どづいつこと！）」

良太郎が言うしかし実際に良太郎が言っているのは心の中。

そんなり

「さつき話したとおりだよ」

リュウタロスが言う。そう今リュウタロスが良太郎の憑いているR
良太郎の状態なのだ

「（久々だからって1日ずつ皆がつくなんて僕聞いてないよ・・・）」

良太郎は心の中で呆れている

そうなぜかイマジン同士が外に出たいという事で1日ずつ体を使う
ことをなぜか良太郎の有無なしで決定したのだった。

「良太郎君！どうしたの急に！」

木場が少し驚いている

少し前まで普通の良太郎が急に変わったのだから・・・

「電車であつたじゃない僕だよ。僕！リュウタロスだよ」

R 良太郎が言う。それを見て木場が、考える

「これが憑依なの？」

木場が聞いたことにR 良太郎は驚いた

「今度はリュウタロスが憑いたのか…」
木場の後ろに居たのは巧だ。

「あれ？2人とも一緒だったんだ」
Rリュウタロスが驚いたかのように言う

「ついさっきそこであつたんだ」
木場が言う。

しかしそこで良太郎の声が心の中で響く

「（あつ！今日おばあちゃんが家に来るんだ！早く家に戻って！）」
良太郎が叫ぶと…

「えゝ僕まだ憑いてから全然経ってないよ」
Rリュウタロスが言う

巧と木場は中の良太郎の話しているのは分かるが知らない人が見ると変だ。

「（じゃ…話が終わったらまた憑いて遊んでいいから！ね…お願い）」

良太郎のお願いが聞いてR 良太郎は、

「分かったよ…」

R 良太郎が言うその言葉に良太郎は安心する

「でも…その前にあいつらを倒してからね」
Rリュウタロスが目を向ける先にはたくさんのイマジンやオルフェ
ノクが居る

そのたくさんのイマジンオルフェノクはR良太郎がこちらに気づい
た時点でその場を離れる
どうやら場所を変えるみたいだ。

その姿を見てR良太郎と木場と巧は追いかけていく。
その姿を見つめる一人の人物

「うん…これでいいって気がするよ」
カイはそれだけを言い姿を消した

Episode:23 1月13日 疑問 (1) (後書き)

かなり久々になった…

試験が終わってやっと書けた…

そしてやっと話の中盤ぐらいまでいった。

あとののくらい続くんだろう…

多分次の話は戦闘になると思っんですがちゃんと書けるかな？心配
だな…

誤字脱字・感想などがある方はお願いします。

Episode: 24 1月13日 疑問 (2) (前書き)

誤字脱字・意味不明な文などあるかもしれません。が宜しく願います。

「ずいぶん遠くまできたな…」

巧が言う。そうイマジン達が誘いだした場所は先ほどの所よりも郊外人の気配などまったくくない。

その方が助かるのは事実だが

「えっと…リュウタロス？」

木場は、リュウタロスが憑いた状態の良太郎を探す

「此処だよ！」

R良太郎が少し現れる

「どうしたの？」

木場が聞くと

「ん〜中の良太郎が少し疲れちゃったみたいだから少し休憩してたんだよ〜」

R良太郎は言う

「此処は…」

巧は少し思いだすかのように言う

「どうしたの乾くん？」

木場は巧の言葉に不振に思ったのか聞くと
巧はゆっくりと嘆く

「俺が…事故で死んだ場所だ」

巧が言う

巧は幼い頃一度事故で死んでいる

その際オルフェノクとして蘇ったのだ。

しかしスマートブレインとの闘いのさなかで皆にオルフェノクの正体が

バレた事があつたが、最後にはそれを受け入れてくれた。

そして今に至るのだ。

「でも、少し古臭い所だね」

R 良太郎が素直な気持ちをいう。そこはまだ子供のリュウタロスだが仕方ないのだが

「まあ俺が此処で死んだのは10年以上前だからな…」
巧が思い出すかのように言う

「（此処は…）」

良太郎は心の中で思った

「どうしたの？良太郎？」

ふいに思った良太郎を心配し聞く良太郎

「…なんでもないよ」

一瞬思った事をすぐにけした良太郎

そのためリュウタロスには悟られることはなかった。

「へ〜此処お前が死んだ場所だったんだな」

何処からも無くカイが現れる

「カイ…」

R良太郎が彼をにらみつける
それをみてカイはニヤリと笑い

「ほかのうるさい奴に出てこられるとあれだからな…」

カイはそう言い指をパチンと鳴らす。すると

あたりの景色が歪み始めた

するとR良太郎に異変が現れたのだ。

なんと良太郎の意思関係なくリュウタロスが離れたのだ

「えっ???どういう事?」

リュウタロスは実体となつて現れる

それを見てカイは首を傾げる

「あれ〜なんでリュウタロスがここに居るんだ〜?」

「忘れたのか…その技は中に直前についていたイマジンには聞か
ないはずだ

ただし電車の中に居るイマジン連中は呼べないがな…」

カイの近くにいたイマジンは言う

「此処は一体…」

「此処の場所は時間の外れた場所なんだよ…さっきまではむりやり
カイが繋げていただけだ…」

彼のイマジンは続けて言う

「そういういえば…そうだったな」

カイは言うつどうやら忘れえてようだ。
彼の物忘れは相変わらずだった

「でも…時間のはずれの此処だと記憶は曖昧にならないんだよね」
カイは黒い笑みを浮かべていた
今彼は何を考えているかしっかりと頭の中に残っていた

そんな異変をデンライナーに居るイマジン気づいていた

「…おい！そういう事だ」
モモタロスは座っていた席を急に立ち上がる
それにびっくりしたのはハナだった

「どうしたの？」
ハナは驚きながら聞く

「良太郎とリュウタと繋がらないだよ」
モモタロスが必死に言う

「リュウタロスが切ってる訳じゃないの？」

「いやそれはないよ」
ハナの疑問にウラタロスが答える

「ついさっきまではちゃんと繋がっていたよ。それが急に消えたんだ。」
ウラタロスが言う

「せやな…イマジン追いかけてった。その時はしっかりつながってた」

「突然消えたんだ…まるでその場所自体が繋がれていない見たいな…」

キンタロス・ウラタロスと続けて言う

深刻な事態と判断したハナは、

「ともかく幸太郎に伝えて探してもらわないと」

ハナは電話を取り幸太郎が居るミルクディッパーに電話をかけた

ミルクディッパ―

「遅いわね2人とも」

椅子に座ったおばあちゃんが嘆く

そんなとき店のドアが開く愛理が入ってくる

「おばあちゃん。ごめんなさい！まった？」

愛理が申し訳なさそうにおばあちゃんによってくる

「大丈夫よ」

おばあちゃんが言う

愛理が来たことで幸太郎と侑斗はさっきの事を聞こうとしたがそこで電話がなった

近くにいた幸太郎は電話をとった

数秒後電話はすぐきれ走り出した

「愛理さん。ちょっと用事が出来たので抜けます。侑斗さんも来てください」

走りながら出て行く幸太郎。すこし送れて出て行った侑斗。

無論、愛理の断りをきかずに出て行った

「2人ともどうしたのかしら……」

愛理は不思議そうに思った

「なんだよ！行きなり」

侑斗は走りながら行きなり外に連れ出した幸太郎に聞く

「今、じいちゃんがどこかで戦ってるみたいんだけど、モモタロス達が全然じいちゃんと繋がらないだって！だからどこに居るか分からないみたい……」

幸太郎は息を吐きながら言う

「繋がらないって……どういうことだ！」

侑斗は普通ではありえないことに驚きをかくせない

「ウラタロスが言うにはまるでその場所自体が繋がらない場所にあるって……」

幸太郎は言う

「なあ……確か野上と一緒に木場さんも居たはずだよな……」

侑斗は思い出すかのように言う

それに幸太郎は俯く

「この時代で繋がってない場所なんて……」

幸太郎は必死に考える

「とにかく探そう……その前にデネブでこい」

侑斗が走りながらデネブに話しかけると、どこからもなくデネブが出てきた

「なに？侑斗？」

デネブも走りながら聞くが走る速さが違うためかどんどん距離が開いていく

「これ持ってまたゼロライナーに帰ってる！」
侑斗は手に持っていた本をデネブに投げつける。
デネブはそれを慌ててキャッチし、「了解！」という
しかしそれを言う頃には2人の姿は見えなくなっていた。

一方の良太郎たちは戦いの真っ最中だった

巧はファイズとなり、木場はホースオルフェノク 良太郎はライナーフォームとなり戦い、リュウタロスはリュウボルバを使い良太郎の援護をしていた

「くそつきりにないぞこれ！」
ファイズはファイズフォンに103とコードを入力する
ファイズフォンはフォンブラスターとなり
一発ずつ確実にイマジンオルフェノクに当たっていく

「確かに」
ホースオルフェノク木場も剣で一匹ずつ敵をさしていく

「はあはあ…もうなんでこんなたくさんでてるの？」
ライナーフォームはだんだん息が上がって行き、
デンカメソードも中々あたらなくなってきた

「ちょっと…良太郎大丈夫??」
リュウタロスはリュウボルバを使い敵にあてながら、良太郎に近づいてくる

「うん…」

良太郎は言うがどうみても大丈夫に見えない

「良太郎はどこかに隠れてて！」

リュウタロスは良太郎を庇うかのように前にでる

「そんな！僕も一緒に戦うよ」

良太郎は必死に言う

「でも少しやすまないと！」

リュウタロスが強く言う。

リュウタロスが強く言ったことで良太郎は折れたのか

「分かった…でもすぐにまた戻るよ」

良太郎はそっくりい邪魔にならないように物陰行く

「困るんだよね〜そういうことされると」

突然後ろから聞こえた声に振り向くとそこにはカイが居た
見事に不意を疲れた良太郎

「良太郎！」

リュウタロスは突然後ろから聞こえたカイの声を聞きそっちに
いこうとするが

彼の目の前に大量のイメージが現れる

「リュウタロス！」

良太郎が近づこうとするが目の前にはカイが居るためかその場所か
ら動けない

「まずはその変身を解いてもらわないとな〜」

カイはそついいベルトに手を掛ける。するとベルトははずされてしまふ

「…」

良太郎は、変身が解けた状態でもカイから目を離すことはなかった。

「そんな目するなよ」こっちはただ話をしたいだけなのにさ」
カイは気楽な口調で話す、顔は笑顔ではなかった

Episode:25 1月13日 疑問 (3) (後書き)

2話続けての投稿となりました

そして戦闘シーンやっぱ難しい…

特にファイズ色々な武器があるから結構ややこしい。

だから変な部分とかあるかもしれないけど許して下さい。

Episode: 26 1月13日 疑問 (4) (前書き)

誤字脱字・など多いかもしれませんがお願ひします。

「くそつ。何処に居るんだよ!」
侑斗は声を荒げて言う

「時間がつながつてない場所を探すのも無理あるけどね」
幸太郎はあたりを見回しながら言う

「までよ…時間がつながつてないと言うことは人気の無いところな
んじゃ…」
侑斗が思いつく

「でもこちら辺でひと気の無いところって…」
幸太郎が考えこむ

「あれっ…幸太郎君に侑斗君じゃない…どうしたの?」
声を掛けてきたのは、三原だ

「三原さん実は…」
幸太郎は簡潔に今起こっていることを説明した

「こちら辺でひと気の無いところってあそこぐらいだな」
三原は考えこみながらその場所へ向かっていった

「どついう事?」

良太郎は信じられないと言う顔でカイを見つめる

「どういうってそういうこと。」

カイは素晴らしいながら手に持っていた真っ白いカードを良太郎に投げ

それは良太郎の目の前に落ちる

「それじゃ…」

素晴らしいカイは姿を消す

すると周りに居たイマジンやオルフェノクは何事も無かったかのよう

「良太郎!!」

リュウタロスはすぐに近寄ってきた
後ろには木場と巧も続いていた

「良太郎今の話…」

話のすべて聞いていた3人

「皆に相談したほうがいいと思うよ」

「そうだよ! バカ桃に頼むのはあれだけどさっ…話が話したしさ…」

巧・木場。リュウタロスは続けて言う。

皆良太郎を心配し気を使っているのだ

「ね…リュウタロスそれに巧さんに木場さん今日あった事は誰にも
言わないでくれる?」

良太郎の言葉に3人は驚いた

「えっっ!でも…」

リュウタロスは戸惑いながら言う

「カイ此処は時間のはずれって言ってた。たぶん、会話は此処にいる3人以外知らないと思うんだ」

良太郎は続けて言う

「でもな…良太郎…」

巧みは話の内容が内容なためか言った方がいいといおうとしたが

「いいから！黙ってって！」

良太郎の強い口調に皆は黙るしかなかった

「（皆に相談できないよ…こんな内容）」

良太郎は心の中で思った

カイから言われた内容…

それは自分すら知らない事

「見て！景色が戻っていく」

リュウタロスが言う

「じいちゃん！」

遠くから幸太郎の声が聞こえる

隣には侑斗が居る

そして三原が2人の目の前を走っていた

良太郎はカイから貰った真っ白いカードをポケットのなかに入れる

「敵は？」

侑斗が聞く

「ついさっきいなくなった…」

巧が言う

「でもさっきまで此処は時間のはずれだったみたいだけど誰かいたの？」

幸太郎が聞くと

「さっきまでじゃなくて元から此処は時間の外れだった見たい」
良太郎が言う

「でもなんで今は時間のはずれじゃないの？」
幸太郎は不思議に思う

「分からない…でも此処は早くさつた方がいいと思う」
良太郎はそういうとその場を離れた

時間のはずれだった場所
でも今は時間の外れではない…

Episode:26 1月13日 疑問 (4) (後書き)

次で「疑問」の題名は終わらせたいと思います。

そういえば、昨日の韓国vs日本すごかったですね！
応援していました。

日本5 32連覇おめでとございます！！

感想などがあつたら宜しく願います！

Episode : 27 1月13日 ゼロライナー

ミルクディッパー

「ただいま」

良太郎がドアを開けて入ってくる

中には心配そうに愛理とおばあちゃんが座って待っていた

「おそかったじゃない。心配したよの？」

愛理が心配そうによってくる

「ごめんね。おばあちゃんも心配かけてごめん」

良太郎が謝る。

おばあちゃんは気にしないでと言いそれを許した

「そういえば幸太郎君はそれに木場君は一緒じゃないの？」

愛理は辺りを見回すがしかしそこには2人の姿はない

「木場さんなら幸太郎と途中であって一緒だよ」

良太郎が言う

幸太郎は良太郎のおばあちゃんが居る事を知っていたので

迷惑にならないようにゼロライナーに居るといい良太郎だけ帰ってくる事になった。

「まあ、そうなの」

良太郎の言葉に愛理は納得したように俯いた

「で、17日どうしましょうか？」

おばあちゃんが皆に聞く

「そつね〜どうしましょうか？」
愛理も考える

こうして話し合いは始まった

ゼロライナー

「はいどうぞ」

デネブは各自椅子に座っている皆に飲み物を出している
その状態で話し合いが始まった

「そこには。ラッキークローバは居なかったの？」
三原が先程まで戦っていた、巧と木場それにリュウタロスに聞く

「ああ」

巧はその質問に俯き、木場も俯いた

「でも、カイが居たよ」

リュウタロスが言う

その言葉に侑斗と幸太郎は驚いた

「カイが居たのか？」

侑斗がもう一度聞きなおすと

「だから居たって言ってるじゃない！」
リュウタロスは先程よりも大きな声で言う

「カイは何を考えてるんだろう?」
幸太郎は飲み物を口にして再び考えた

「さあなでも、あいつの事だやばいことだろ」
侑斗は今までのカイの行動を思い起こしてみた
どれも、イマジン達を使い、自分達の時間に繋げる
そのために今の時間を壊そうとしていた

「何か聞いてないか?」
侑斗は再び3人に聞く

「さあ…な?」
巧はしどろもどろになりながら答える

「…」
リュウタロスに居たつては黙ったままだ

「聞いてないよ。でもそういうのって余り言わないんじゃない?」
他の2人に比べ何事も無いように喋る木場

「本当に何もいってないんだな」
侑斗が念を押すためもう一度聞くと

「しつこいな!知らないって言ってるじゃない!」
リュウタロスはどうとう怒り出してしまった
そんなリュウタロスを見て、宥める木場と巧

そんな時、デンライナーが停車した

「じゃ、僕戻るから！」

リュウタロスは怒ったままデンライナーに戻っていく

「じゃ、僕らもそろそろ降りるよ」

木場も席を立ち巧を連れて外に出て行った

「じゃ、また後でね」

三原も2人の後に続いた

そんな様子を見ていた幸太郎と侑斗とデネブ

「どう思うっ？」

侑斗が問うように聞く

「どう思っつて？」

デネブは侑斗の質問の意図が分からないのか聞きなおす

「何か隠してるような感じだったね」

幸太郎が言々と侑斗が俯く

「ねえ？何が隠してるの？」

いまだに状況が読めてないデネブ

「だから！リュウタロスや乾の言動だよ！」

侑斗がしつこいデネブに苛々してきたため理由を言う

それにデネブは納得しうつむく

「確かに…カイの目的知ってるのかな？」

幸太郎が不意に思った

侑斗も考えた

しかしついさっき出て行ったあいてに同じ事を聞くのは少し気が引

ける

「今日はあれだけどまた何日かしたら聞いてみる？」

2人が会話を交わす中、巧達が出て行ったドアからテデイが現れた

「デネブさんさっきのノートこっちに持ってきますか？」

テデイがデネブに声を掛ける

「そうだったな。ちょっと待ってってね侑斗」

デネブはそういい部屋を移動する

しかししばらくたってもデネブは戻ってこない

聞こえたのは、妙な雑音と彼ら叫び声だった

Episode:27 1月13日 ゼロライナー（後書き）

ただいま春休みで宿題に追われています
早く終わらせないと…

久々に、テデイが出てきました
テデイちゃんと出さないと…
忘れちゃってます

今回は久々に敵の様子を書きたいと思います

感想。誤字脱字・などあったらお願いします

Episode: 28 1月13日 思考と交錯(前書き)

もうすぐ春休み終わっちゃうな…

研究所

「あなた一体何処にいったの？」

ロブスターオルフェノクが尋ねる

カイはゆっくりと歩いてくる

「あれ何処に行つてたわけ？」

カイは首を傾げ考えている

すると彼の近くに居たイマジンが小言で言う

「あゝそういえばそうだったね」

カイは思い出したかのように手を叩く

しかしその話はロブスターオルフェノクは聞こえていなかったらしくて

「なんの話？」

ロブスターオルフェノクは更に聞く

「これから必要な事？」

カイは語尾に疑問系をつけ言う

「なに？じゃまなあの子を倒す方法？」

ロブスターオルフェノクが言うあの子達とは、ファイズ・デルタ・

カイザたちのことである

「でも、今の私達なら負けませんよ」

村上が笑いながら言う

「僕はあの電王って言う奴と戦ってみたいな」
北崎は笑顔で言う

「電王？でもあいつは駄目だよ。あいつはこれからの事で必要な
だからさ」

カイは北崎の笑顔よりさらに笑顔で答える

「あの子が？」

ロブスターオルフェノクは不思議そうに言う

「そう。そのためにはまず…あの時間に繋げないとね」

カイはそういいながら手帳を捲るそして一体の光の玉を飛ばす

「あいつらにはバレないようにしてね」

カイが軽く言うと光の玉は俯き目的の人物目指して飛んでいった

ゼロライナー

「どうした!？」

侑斗が声を出しているデネブとティディに聞くと

「ノートが…ノートがないんだ！」

デネブが慌てながら言う

「ノートってさっきお前に渡しただろ！」

侑斗は怒りながら言う

「貰った…でも木場たちが来るしノートを一回移したんだ…そして
らなくなったんだ」

デネブが必死に言う

「どういうことだろ？時の列車だし出入りできる人は限られてるは
ずだよ」

幸太郎が言う。確かに時の列車は出入りする人が限られていて、ゼ
ロライナーなら最もだ

「誰か居ないのでですか？ゼロライナーを乗り降りできる人物」
テデイが聞く

2人は必死に考えている
そして侑斗はひらめいた

「あいつだ…未来の俺だ」

侑斗はデネブに言う

「でも桜井は…」

デネブは思い出す

桜井は最後の戦いするとき自分の記憶のカード侑斗が使った事により
消滅した

「分からないよ…一度死んでいる木馬さんや長田さんそれに草加さ
んだって今回生き返ってるんだ…」

幸太郎が言う

「桜井も生き返ったのか…」

デネブは目を見開き言う

「分からない…でも本人を探すしかない」
侑斗は言う

「そうだね・・・」
幸太郎もその案に納得した

「しかし…桜井は何がしたいんだよ…わざわざノートを奪ったりして」

デネブが言うがそれは皆が知りたいことだった

ミルクディッパー

「ただいま」
木場が帰ってくる
すると話し合いは終わったのかその場には愛理しかいなかった

「あらっ？お帰りなさい。幸太郎君は？」
愛理は幸太郎が一緒じゃないのに気がつき聞く

「途中で寄りたい所があるって途中別れたよ。そういえば良太郎君は？」
幸太郎はまだゼロライナーに居るがそんな事はいえないため寄る所があるとっておいた
なにより気になったのはその場に良太郎が居ない事

「良ちゃんなら…今日は先に家に帰ったわよ…」
愛理は悲しい顔をしながら言う

「そうなんですか……」
木場は納得した顔をしながら言う

「良ちゃん……」

愛理はコーヒーを沸かしながらふと思った

帰り道

「良ちゃん……」

おばあちゃんは先程までの会話を思い出していた

「お母さんお父さんが死んだ17日僕は何してたっけ？」
良太郎が2人に不意に聞く

「良ちゃんは確か……その時熱を出して寝てたわよ……」
おばあちゃんは思い出しながら言う
その言葉には愛理も俯いてた

「……やっぱり言ったほうがいいのか……でもそのためにはあれを……」
おばあちゃんが考えながら歩いてた
しかしその後ろに付きまとう影にはきづくはずもなかった

「にしても、大変だったね」
三原が隣に居る巧に声を掛ける

「まあ・・・な」

巧もその言葉に俯く

その時あるある人物とすれ違う

巧は意識的にその人物を目で追う

「どうしたの？」

三原がそれに気づいたのか聞くと

「嫌な…あそこに」

巧が指差そうとしたがそこには先程の人物は居なく…

「誰も居ないじゃない？」

三原は不思議に思いながら足取りを速めた

「さっきまではいたんだけどな。全身薄茶色の羽織や帽子を着た人が…」

巧はもう一度振り向くがやはりいなかった。

Episode : 28 1月13日 思考と交錯（後書き）

自分の言葉遣いの癖が「ん」とかそういう変な言葉多く入れちゃうんだよね…

直らないかな？この癖…

感想・誤字脱字などがあつたらお願いします。

Episode:29 1月17日 真実(1) (前書き)

新学期の始まり！
心機一転頑張ります！

日は過ぎていく…

数日前…

「お前の望みを言えばどんな望みもかなえてやる…」
どこからもなく聞こえた声
その声に思わず願いを言った
かなえられるはずも無い

「かなう訳あるのかな？」
おもわず言葉をもらすおばあちゃん、だがその願いが思わぬ方向に動いていた

ミルクディッパ―

今日は午前中だけの営業のミルクディッパ―
まだ客足も少ない

「あれっ？珍しい客だね」
幸太郎が思わず言葉を漏らす
そこには、長田と啓太郎そして草加と巧そして真理、三原、里奈が
居る

「どういうだそれ？」
珍しいという言葉に少し嫌味を感じた巧が言う

「いや…」

幸太郎は思わず言葉に詰まってしまふ
悪気があつたわけじゃないのだが

「ま。いいじゃない。そういえば草加さんと長田さんは此処にくる
の初めてだよな？」

良太郎が2人に言う。その言葉があつてか巧と幸太郎の言葉は途絶
える

「前もらつたコーヒーもらつていいかな？」

啓太郎が言うその言葉に巧も俯いた

里奈と真理そして三原も俯いた

初めて来る長田と草加はメニューを見る

そして長田はココアを

草加はオリジナルブランドを選んだ

「今準備するから。待つてって」

良太郎はそういいながらコーヒーの準備をする

ドアが開く、そこには侑斗とハナが入ってきた

「良太郎！」

ハナが声をかける

後ろで侑斗は軽く手を上げ挨拶している

「…一つ頼みたいことがあるんだがいいか？」

草加はゆっくりと口をあける

「何？」

良太郎が草加のほうに顔を向ける

「あの電車を貸してほしい。行きたい時間があるんだ」

草加が言う。その言葉に皆が驚いたのは言うまでもない

「…デンライナーを使ってどうしたいの？」

幸太郎が言う

「俺たちが一度死んだ時間…そこに行きたい」

草加が言う

その言葉に元流星塾のメンバー、三原・里奈・阿部の顔が暗くなった

「無理だ…それにまずチケットがない」

侑斗が言う

「仮に行ってもどうするつもり？」

木場が草加に尋ねるその問いに草加は、

「俺たちが死んだという事実を無くしたいんだ」

草加が言った事に驚きをもったのは良太郎・幸太郎・そして侑斗だった

「そんなの…無理に決まってるじゃない」

ハナが言葉を漏らす

「そしたら…あなたがカイザに変身できる理由もなくなるよ？」

良太郎がいう言葉に、ハナと幸太郎そして侑斗が俯く

「それってどういう事？」

真理が口を開く

「その過去があるから今があるんだ…もしその過去を変えるなら、草加さんがカイザとして変身する理由も無くなる…そして、巧さんが真理さんと会ってファイズとなる理由もなくなるんだ」
良太郎が言う。その言葉に啓太郎が

「そこまで変わるものなの？」
啓太郎の疑問に侑斗が答えた

「そうだ。それに闘いがなかったらオルフェノクも減らず増えるだけの世界…になるぞ」
侑斗に言葉に皆は黙っていた

「流星塾ってなんだか知ってるか？」
草加が思わず口を開く

草加がこれから言おうとした言葉にそれを知っているメンバーは慌てている

「そこまで言わなくてもいいと思うよ」
木場は草加を止めようとするが草加は止まらず

「流星塾は…九死に一生を得た子供の集まり…両親も居ない…のうのと暮らしているお前らに何が分かる！少しぐらい過去を変えてもいいだろ！」

草加は怒りに身を任せながら言う。
侑斗達が口を開くより先に口を開いたのは良太郎だった
しかしいつもの良太郎とは違いその目は違っていた

話し合いが起こる前のデンライナー

「最近の良太郎へんじゃないか？」

モモタロスが思わず言う

その言葉にはキンタロスとウラタロスが納得した

「確かに…1月13日…カイと戦ったときぐらいじゃないかな？」
ウラタロスは思い出しながら言う

「せやな…その時からか良太郎とも繋がりにくくなつとるし…」
キンタロスが言うように最近良太郎とはつながってない
というよりも良太郎が無理やりとっていいほど繋がりを切っている

「リュウタは、あの時一緒に戦ってたけど何か知らないの？」
ウラタロスはおくに座っているリュウタロスに聞く

「…」
以前として口を開かないリュウタロス

「だめだな…これは」
モモタロスはため息をつく

「あの〜」
モモタロスの後ろから声をかけるティィその後ろにはデネブがいる
突然の事でうるたえるモモタロス

「どうしたの？おデブちゃん？」
ウラタロスがティィの後ろに居るデネブに聞くと

「ノートを探してるんだ…」
デネブが言う

「ノートってどんなノートや？」
キンタロスはノートだけではわからなかったから聞きなおすと
2人は目線はずしうるたえている

「言わないと分からないよ？それとも僕らにもいえない事？」
ウラタロスが目を光らせ言う
その目に懲りたかデネブは口を開く

「野上…加代子」
デネブが言った言葉に皆は固まった

「良太郎のお母さん？」
おくに居たりユウタロスが口を開く

「ああ…野上加代子と書かれたノートだ」
デネブが口を開く

「それが突然なくなっただんですよ…1月13日に」
デデイがくちを開く

「その内容はなんだ？知ってるだろ？」
モモタロスが声高く聞くとデネブはゆっくりと話した。

その内容を聞き一番慌て始めたのはリュウタロスだった

「その内容知ってるのは?!」

リュウタロスが慌てて聞く
その慌て振りに驚いたデネブ

「どうしたんだ？急に？」

デネブが聞くとリュウタロスは「いいから早く」という

「このことを知ってるのは私達のほかに侑斗さんと幸太郎ですよ
それを聞いたリュウタロスは急いで外に出ようとしたが

「待った！」

ウラタロスがリュウタロスの腕をつかむ

「何するの？亀ちゃん！」

リュウタロスは必死に腕を振りほどこうとしているがそれはなかなか離れない

「リュウタ…何を知ってるの？もう此処までの事になってる…隠し事はよくないよ…」

ウラタロスの真剣な目に顔を沈める

「分かった…良太郎には止められてるけど…言うよ」
リュウタロスがゆっくりと口を開く

それはとんでも無いことだった。

その話を聞いて最初に動きだしたのはモモタロスだった

「じゃ…今回の事件は…」

モモタロスが恐る恐る言う

「だね…」

ウラタロスも俯く

その時ナオミから声がかかるその声は慌てていて

「幸太郎ちゃんから電話です〜」

ナオミは慌てて電話を誰かに渡そうと受話器を振った
それを受け取ったのはウラタロスだった

「どうしたの？幸太郎？」

ウラタロスが電話口で答える

彼が出たことで幸太郎は一瞬戸惑ったが、
デネブとテディから話を聞いたことを言うと幸太郎はわかったのか

「ミルクディッパーにノートが出てきたんだ！それを見てじいちゃん
んが…」

幸太郎の声は暗くなる

「良太郎…気づいたんだ…記憶の違いに」

ウラタロスが嘆く

幸太郎は記憶の違いという言葉に違和感を持った。

「とにかく、今からそっちに行くね。そういえば巧さんと木場さん
は？」

ウラタロスが聞くと幸太郎は、巧は出て行った良太郎を追いかけて、
それをハナと侑斗と真理が追った。

「じゃ…木場さんに聞いて！彼も理由を知ってるはずだから！」
ウラタロスはそっくり、電話を切る

「さて…僕らも行きますか…ナオミちゃんいつものね」

ウラタロスは電話を受話器に戻すとナオミに声をかける

「いつもの」勘のいいナオミは「了解！」といい奥に入っていく

Episode:29 1月17日 真実(1) (後書き)

何かいろいろ混みあってすいません。

しかもいつものようにキャラの口調も合っていない…

本当にすいません

1月17日まで行ったからもう終盤です。

そして何か今回は結構長めになってしまった。

そして久々に草加・長田など久々に出せた

誤字脱字・感想などがあつたらお願いします

Episode:30 1月17日 真実(2) (前書き)

誤字脱字・言葉遣い間違い

等多いかも知れませがよろしく願います。

そつ…少し苛々していただけだった

だから草加が言った事に無性に腹がたつた

そつ…それはカイが言ったあの言葉

「だからそんな顔するよな」

カイは笑いながら言う

「話つてなに？」

良太郎はカイから目を逸らさず聞き返す

それを聞いてカイは更に良太郎に近づき懐からカードを取り出す

「黒い…カード？」

良太郎はカイの手に持つ黒いカードをみる

それは侑斗が変身するときに使っゼロノスのカードに似ている気がする

そしてその黒いカードを良太郎にかざす

するとその黒いカードは真っ白い白いカードになった。

「何で…白いカード??」

良太郎は混乱していた

黒いカードはいきなり白いカードになった

そしてなにより気になるのは白いカードが2枚あること

「あはっ。やっぱりそつという事か…」

カイは納得したかのように2枚の真っ白いカードを見る

「やっぱりってどういう…」

良太郎は立ち上がるうとするが疲れがたまっていたから立ち上がる
ことが出来なかった

「このカードは特殊なんだ…」

カイはカードを上に掲げて見せびらかすように言う

「特殊？」

良太郎はカイの特殊と言う言葉を繰り返して言う

「そう…そういえば桜井侑斗が変身するゼロノスのカードだけそ
れについては知ってるよね？」

その言葉に良太郎は俯く

ゼロノスのカードは桜井侑斗に関する周囲の記憶を使い変身していた
つまり使う毎に、人々の記録から桜井侑斗と言う人物は消えていく

「でも…この白いカードはそれとは対になる効果を持つてるの」

カイは上に掲げていたカードを下に下げる

「それは…人が忘れている事をこの白いカードに移せるの…俺が言
っている事分かるよね？…しかもそれはゼロノスのカードを対象と
すること」

カイの言葉に良太郎は驚いた。つまり自分はゼロノスのカードによ
り2つ忘れていたことがあるのだ。

「一つは、あのハナって女だっけ？その女の出生を隠すためあの桜
井侑斗がゼロノスのカードを使い、お前とその姉野上愛理そして桜
井侑斗が記憶をなくすことで隠した存在…。そして今がある」

カイは黙々と言葉を並べていく。

ここに居るカイは本当に記憶は曖昧じゃないようだ
たしかに桜井さんは未来を守るためゼロノスのカードを使った

「じゃ…もう一枚のカードはなんだ…」

カイの言葉に良太郎は何も言えなくなってしまった
何かか隠されているこのカード…。

しかし、一つ思い当たることがあったがそれは違った
なぜならそのことは姉さんも含めおばあちゃんも覚えて居ること

「僕は…何を忘れてるの？」

良太郎は2枚あるうちの1つのカードをじっと見つめ考え込んだ

「やっぱり…ねえ、いいこと教えてあげるよ…」

カイはその場を離れながら言う

「この白いカードは対となる物がある…それは白いパスケース…
真実はそれに隠されてるよ」

カイは言う。

そして白いカードを良太郎に投げつけた

しかしいまだに白いパスケースを見つけることはできない。

自分が何かを忘れてる…

そんなときだから草加が言ったことい腹がたったのかもしれない

「あなたに何が分かるの？」

良太郎はそういいながら、草加に目を向ける

「何って…」

草加は思わず言葉を続ける事が出来なかった

「何も知らないくせに…のうのうと暮らしてる？それはどうやって
みたの？」

良太郎といつともとは違った言葉遣いにハナ達は

「ちょっと…良太郎？」

ハナは必死に良太郎を宥めようとするが

「ハナさんは黙ってって！」

良太郎は大きな声で言う

その言葉にハナも黙ってしまう

「じいちゃん！落ち着いてよ」

続いて幸太郎も宥めようとするが、

「幸太郎も黙ってって！だいたい何か僕に秘密にしてる事あるでし
よ！それは」

良太郎はそういいながらハナと侑斗も見る。

2人は何も言えない為かそのまま顔を落としてしまう

「どうやってって…こ少しの様子を見たら」

先程の勢いがなくなってきた草加。

そついい席を立ち上がる時、偶然なのかカウンター席においてあつ
た写真たてが倒れてします

「あつ。写真たてが…」

長田が指差す先には倒れている写真たて。

それは真ん中から中心にヒビが入り、中の写真も傷ついていた

Episode:30 1月17日 真実(2) (後書き)

長くなりすぎるとあれなので、

中途半端ですが区切りました…:すいません。

この話では、良太郎がカイに言われたことを明かしました。

Episode: 31 1月17日 真実(3) (前書き)

最近、忙しくて…

すみません…

それではどうぞ…

「おい…大丈夫…なんだこれ？」

巧は写真たてを取ろうとして写真たてを持つがすぐに違和感に気づく

「手書き？」

真理もその写真を覗き込む

「写真悪かったな…」

草加は自分が席を立ち上がった反動で倒れてしまったので謝罪をする

「写真他のないの？」

啓太郎は心配そうに聞く

「今手元にあった両親の写真はその写真だけなんだ」

良太郎は少しさびしそうに言う

「他に撮ったりしなかったのですか？」

長田が聞くが良太郎は、黙ったままである

「野上の手元にある写真はそれだけだ…野上の両親は小さい頃になくなっている」

黙ったままの良太郎のかわりに侑斗が話す

それに巧達は驚いたそしてだれよりも、驚いたのは草加だった

「それだも、良太郎は過去を変えて両親に会おうとした事はなかったのよ」

ハナは付け加えるように言う

「（あれっ？なんでこの写真だけ？たしか）」

幸太郎はそう思いながらカウンター席に向かおうとしたとき
愛理の常連客の「忘れ物」になぜか足をとられてします

そのまま、「忘れ物」箱とともに幸太郎は躓きそして箱は落下した

「ちよつと…幸太郎大丈夫なの？」

良太郎はカウンター席の近くから飛び出し、そして幸太郎に近づく

「なんとかね…」

幸太郎は頭を掻きながら下に落ちた「落とし物」を拾いながら言う
良太郎も周りに落ちたのも拾っていく

「なんだろ？これ？」

良太郎はあるものに目をつけた

それは一冊のノート

「野上…それは」

侑斗は、そのノートを見て冷や冷やしている

「なに？そのノート？」

ハナは顔を覗かせるしかし、ノートが裏側になっているためか
誰の所持品なのかは、分からない

興味本位で少し見てみたいと思っってしまった良太郎はノートに手を
書ける

「じいちゃん…悪趣味じゃない？他人のノートだしさ…やめたほう
が…」

幸太郎もそのノートを見てやめさせようとする

「一応落し物だし…中身見たら誰のかわかるかもしれない…それに

このノートは……」

良太郎はノートに目を向ける。

何よりもこのノートの中身を知りたいと思ってしまった
ゆっくりと後ろから前へとノートを捲っている

ページが中間ぐらいに差し掛かったときに良太郎の手は止まった

「どうしたの？」

ハナがたずねる。

それは良太郎の顔がだんだん悲しい表情を含んだ顔になってきたから
その雰囲気にも巧達も何があったのかと不思議に思う

「良太郎君……何が書いてあったの？」

気になった木場もカウンターから出てくる

一方の侑斗と幸太郎は、そのノートに書かれた内容を知っているか
らか

沈めた顔をしている

ゆっくりとノートを閉じる良太郎

ノート表紙には名前が書かれている

名前は野上加代子……

それをみて、その人物を知っている人たちは驚いた……

まず最初に、言葉を発したのは、木場だった

「良太郎君……そのノート知ってるの？」

木場は悲しい表情をしたままの良太郎に尋ねる

「知らない……こんなノートあったの？」

良太郎は顔を横に振る

その時、良太郎はカイが言ったある事を思い出す
自分が忘れたもう一つの記憶

「僕はこのノートのことを忘れていた…そして」
良太郎はゆっくりと顔を上げる

「僕は、あの時熱など出してなかった」

遠くから足跡が聞こえてくる
そこから出てきたのは愛理だった
それを見た良太郎は、

「姉さんの…嘘つき…僕はあの時、熱出してなかったんだよね…」
そう言い外に走って出て行こうとする良太郎。
その目の前に幸太郎があらわれ衝突してしまう
その時幸太郎のポケットから白いパスケースがこぼれおる

「あつ…」

幸太郎は思わず言葉を漏らす
白いパスケースを見てそれを拾いあげそのままミルクディッパーを
出て行く

「おいっ！まてよ！良太郎」
巧はそのまま出て行った良太郎を追いかけ出て行った

「ちよつと！待って！巧」
出て行った巧に続くかのように後を追う真理
その後ろに、侑斗と八ナも続いた

Episode : 31 1月17日 真実(3) (後書き)

久々になってしまいました

良太郎の口調が…

全然違う…

本当にすみません…

未熟なもので…

良太郎は、こんな口調悪くないのに…

感想・誤字脱字の指摘などがあつたらお願いします。

Episode : 32 1月17日 本当の思い (1)

「木場さん…今、ウラタロスたちと連絡ついて…詳細は木場さんに聞いてと…」

幸太郎はゆっくりと木場の方に向く

「えっ？木場さん何か知ってるですか？」

長田は首をかしげて言う

「それほど詳しいことは知れないけど…」

木場はあのとときの、良太郎とカイの会話を簡潔に説明している

「じゃ…じいちゃんが、失ってる記憶って…」

幸太郎は、考え付いたかのように言葉を選ぶ

「多分。さっきのノートの事ね」

里奈は先程のノートを見て確信した

「しかし…もつと詳しいことが必要だろ…」

草加はゆっくりと愛理が居る方に向く

「えっ？でも良太郎君が覚えてないなら愛理さんもおぼえてないんじゃない…」

啓太郎はそう思いながら首を傾げるが

「それは、ノートの事…」

ゆっくりと告げる三原

「そう…あの事件の当日のことを忘れてるはずがないよ」

そう言い聞かせ愛理に聞こうとしたとき、
大きな音がしてドアが開いた
そこにはペンギン・龍・狼・象・のぬいぐるみを着た人物がいた。

「何してんの。モモタロスたちは？」

幸太郎はふと疑問に思う

そして彼らの背中には、剣型になっていたテディがあつた

「イマジンの姿じゃ、出歩けないから、その代わりだよ」

服装を見せながらモモタロスは言う

「たぶん…それでも周りの視線はあるとおもつよ…」

啓太郎はふと思った。

カラフルなきぐるみを着たのが4人も居たら誰でも目を引くだろう…
しかし、今はそんな事を考えている場合じゃなく

「ねえ…愛理さん…一体何を隠したかったの？」

幸太郎が、その場所を動こうとしない愛理に尋ねる

「…あのとき良太郎は、お母さん達と一緒に買い物に行ったの…」

愛理はゆっくりと当時を思い出すように言う

「でも…そのデパートで突然事故が起きたの…。私も良太郎も事故
に巻き込まれた。

私はその後お母さん達が事故で亡くなったのを知ったの…。
でも良太郎だけは、運悪く頭を強く打つたためか…その時の事を忘
れてたの」

愛理は言った。

良太郎の不運はこのときから健在だった

「それで、いえなかったの？」
里奈が言う

「違うの…言おうと思ったけど。ある人が言ったの…今はそのまま、嘘でもなんでもいいからこのことはまだ良太郎は知らないほうがいいと…」

愛理が悲しそうに言う。

「本当は…良ちゃんも、大人になったからそろそろ言おうと思った…」

「でも、それを言う前に自分から良太郎は気づいてしまった」
愛理は何処で気がついたかはおそらく知らないだろう…

良太郎はゼロノスのカードによりあの、ノートの事を忘れていた

「良ちゃんには謝らないと…」

愛理はそっぴい良太郎を追いかけようとする

その時再びドアが開く

入ってきたのは良太郎と愛理のおばあちゃんだ

しかし、モモタロス達は気づかなかった

此処にたくさんのイマジンが居たからか…

あらたなイマジンに…

Episode:32 1月17日 本当の思い (1) (後書き)

世間じゃGWだけど、まだGWに入っていないです。

私のGWは、日曜日からの連休の4日間…

4日とあんまり実感わかないよな〜

今日は5月1日…

「超電王vsデイクイド」の公開日です。

暇が出来るかわからないけど、見に行きたい！

絶対に行きたいと思ってます。

後、「GOEMON」も公開します！

気がつくとも自分は外を走っていた

「待てよ！野上！」

侑斗は声をかけ、走っている良太郎を止めようとするが、それでも良太郎は止まらない。

良太郎はそのまま道を右に曲がり、細い道に入っていく。そして何処にある、自分の家に入って鍵をかけた

「良太郎！此処あけて」

ハナは必死にドアをたたく

それでも良太郎の返事はない

「ここぶち壊すぞ」

巧は思わず言う

しかしそれを真理が止める

「馬鹿！ドアなんて壊したら、犯罪になるじゃない」

真理が思わず言う

「でも…今はそんなときじゃないと思うわよ」

ハナが思わず言う

確かに、こんな緊急事態に犯罪・犯罪じゃないなどと言ってる場合じゃないのは確かだ。

そんなとき、部屋の中から大きなもの音が聞こえた

「僕はなにやってるんだろっ…」

良太郎は、片手に持ったノートを眺めながら言う

そして、ゆっくりと、ポケットにある、白いパスケースと白いカードを取り出す。

「これは、お母さんの、ノート…」

ゆっくりとページを捲りながら一つ一つ、かかれた文章を見ていく初めて見る、お母さんの字。

文字は一つ一つ丁寧に書かれている

しかし、それも1月16日で終わっている。

「…」

良太郎は、ゆっくりと目を閉じながら、白いパスケースに白いカードを入れる

本当はこの本を見て、だいたいの理由は分かっていた。けどしりたいと思ってしまった。

そしてそれは数分もしないうちに終わった。

「あそこは…前にカイと戦った場所」

このカードに写ったのは、前にカイと戦った場所だが、まだ建物が真新しい。

多分建物が崩壊する前の建物。それがこのカードに移ったと言う事は…

「僕が居た場所はあそこ??」

良太郎は疑問に思った。

その時だった、部屋の窓ガラスが大きく割れた。

良太郎は一瞬目を瞑った。

そしてもう一度目をあけると、そこには、ロブスターオルフェノク

と村上だった。

「あなた達は…」

良太郎は、交互に2人を見る

「あなたの手に持っている、その2つのもの…こちらに渡してもらえますか？」

村上はそういって、片手を良太郎に差し出す

「どうして…」

良太郎は訳が分からなくなって居た

「早くしないと時間が来るわよ」

ロブスターオルフェノクは素晴らしい時計に目をやる

「このパスには…時の電車なんて…」

良太郎は考え込む

「このパスはそのまま。過去の時間に飛べることが出来るんですよ」
村上は素晴らしい良太郎の手からパスケースを奪い取る

「これで過去オルフェノクでオルフェノクを増やして…そして王を…
…王の復活を」

ロブスターオルフェノクはまるで狂ったかのように高笑いをする
そうして改めて良太郎に顔を向ける

「あなたみたいな戦士に邪魔されたくないの…だから、此処で死んでくれるかしら？」

ロブスターオルフェノクはそのままサーベルを良太郎に向け振り落とす。

しかし、それが振り下ろされることはなかった

「その姿。久々に見ますね…乾巧」
村上が言う。

良太郎を庇ったのは、巧がオルフェノクに変化した、ウルフォルフエノクの姿だった

「大丈夫か…良太郎」
そういうとウルフォルフエノクの変身をとく巧
手に構えたのは、ファイズのベルト

「本当は、あなたも始末したいのですが、時間なので失礼しますよ」
村上はそっぴいなながら近くのドアに手を掛ける。

開いた先には、自分がよくみる砂漠の風景は見えなかった
それに続くかのように、ロブスターオルフェノクはその中に入っていた。

その場に残った、巧と良太郎…
着てきたのは、ハナと真理、そして侑斗とデネブの声だった

ミルクディッパー

「どうしたの？おばあちゃん？」
愛理は入ってきて動かないままのおばあちゃんを見て不思議に思った
そして彼女の近くに近づいていく

「駄目！愛理さん」
なにかに気づいた、木場が、愛理を止めさせる

「えっ？」

思わず声をかけられ振り返る

「……」

その時だった、突如大量の砂を流した、おばあちゃんそこには実体化したイマジンがいた

「なっ！？イマジン」

モモタロスは驚き声を上げる

「まあ、誰かに憑いていたのは、分かってた……」

「けどな……お年よりを傷つけたら…アカン」

「僕が、お姉ちゃんを守るよ！答えは聞かないけど」

それぞれ、戦闘態勢にはいる3人。

それにつられ、草加・三原・幸太郎。木場も戦闘態勢にはいる。

それをみてイマジンはミルクディッパーの中央アンティークの天体望遠鏡の柱目指しての攻撃だった。しかしそれはど真ん中に当たることなく少し下の方を掠めた。

しかしそれでも、柱は壊れてしまった。

上にあるアンティークの天体望遠鏡は啓太郎が慌ててキャッチした。

「テディ！」

とっさに攻撃を逸らすために飛び出たテディ。

攻撃を逸らすために受けた傷は大きかった

散らばった瓦礫を掻き集めるイマジン。

彼の手がふと止まった

そこには数冊の古く厚い本

「これが…お前の願いだろ」

イマジンはそれをおばあちゃんの目の前に放り投げる

「それは…アルバム？」

とおくからみる長田。

「それは…両親のアルバム…」

愛理は思い出すかのように言う

「ええっ！でもそれはもうないって」

愛理の言葉に驚く長田。

「まさか…そこにあつたとは」

愛理も信じられない気持ちだった

「待ちあがれ！てめえ！」

モモタロスは、今にも過去に飛び立ちそうなイマジンに攻撃を仕掛けようと走っていく

が、今はぬいぐるみだったためかすぐに扱けてしまう

「間抜けな奴らだな！俺はこのままここに」

イマジンの言葉は此処で途切れた

突然砂のようになるイマジン

「…苦労さん」

そこに現れたのは北崎だ。

突然の来客にさらに険しくなる

「あれ？イマジン倒しちゃったの？」

カイは不思議そうに言う

「君が言ったんじゃないの？」

北崎も首をかしげて言う。

この2人は何を考えてるか分からないことがある
だが逆にそれが恐ろしい事がある

「カイ……」

モモタロスは、突如現れた人物に視線を向ける

「もうすぐ……。あいつが守った時間を消してやる……そして少しずつ・
・少しずつ俺達の時間につなげるんだ」
カイは、いっそうに笑いながらおばあちゃんに近づく

「ご苦労さんね」

そういうと突如時の扉は開いた

そこにカイは入って行った

「じゃあね」

北崎もそれに続いた

2人が入るのを確認するかの様に時の扉は閉じていった

「ちよつとごめんね」

幸太郎はそういいながら、ライダーパスは額にかざす。
浮かびあがってきた日付は、

1992年
1月17日

Episode:33 1月17日 本当の思い (2) (後書き)

気がついたら、GWあけていた…

でもその間、超電王&ディケイド見れたから良かった。

とりあえず今回の話で、敵の皆様には過去に、飛んでもらいました。
多分次は、どっちかを過去に飛ばしたいと思います。

写し出された日付…

「やっぱりか…」

写し出される日付はだいたいの予想していた。

「ご免なさいでも、どうしても、アルバムを見つけたかったの」
お婆ちゃんはそのいいながら近くにあるアルバムを集める。
それをみて愛理も手伝い始めた。

「とにかく早く過去に行かないと」

幸太郎は外をみる。まだ彼らが、ついていないからか、建物は破壊
されていない
だからと言って早く行かないと大変な事になる。

「そんじゃ、早く行くぞ！おまえら！」

モモタロスはそう言うのと誰かと競っているかのように走りす。こう
いうのをやる

と、必ずと言っていいほど、乗る人が誰か一人はいる。

「わあ、競争！僕負けなよ」

モモタロスに続いて走りだす、リュウタロス。

「やれやれ」

ウラタロスは半ば呆れながらあるきだす。キンタロスもそれに続く

「待って」

不意に呼び止められる。呼び止めたのは木場だ。

「僕たちも一緒に言ってもいいかな？」

「どうぞ…ご勝手に。僕が決められることじゃないしね」

少し無責任な言い方をするウラタロス。それだけを言つと、彼もミルクテイパー

を出ていった。キンタロスも続いた。

「僕は行くけど、君達はどうする？」

そう言つと草加と三原を見るまず答えたのはくさかで、

「俺は行くぞ」

そう言つと、彼も外に出て、いく

「僕は…」

三原は悩んでいた

「僕は此処に残ります。そして此処にいる皆を守ります」

三原は此処に残ることにした。

「わかった。じゃ此処は頼んだよ」

そついい、くさかを追うように出ていった木場。

「三原さん。私も一緒に守ります。此処にいる皆を」

長田は三原をみて言つ。

「じゃ、俺もそろそろ行かないと」

最後に残った幸太郎も出ていった。

デンライナーはここから少し離れた所に止まっているらしい。肩に
テディを掛け
ながらそのデンライナーが止まっている場所へ急ぐ幸太郎。
その扉が目の前に迫った。しかしあともう少し、という所で人影が
入る。

「あなたは……」

幸太郎は人影を見る、その人影は、全身を茶色い衣服で包んでいた。

「遅いぞ！幸太郎」

なかでは皆が待っていた。いきなり聞こえたのは、モモタロスの
声だった。

「それは、走って帰ったからでしょ？」

ウラタロスが少し呆れながらいう。

「そういえばさ。幸太郎、その手に持っているのはなに？」

リュウタロスが、指をさす。

幸太郎の片手には風呂敷が握られていた

「これは……クライマックスに必要なものだよ」

幸太郎は風呂敷を軽く上にあげ言う

「おいおい！それを俺の言葉だ！」

自分のきめ台詞を取られ少しご機嫌ななめになるモモタロス

「そんなことどうでもいいだろ」

草加はあまり興味が無いからかあっけなく言う

「そんなのはな」「そうだよ。幸太郎早くデンライナー出しちゃって」

モモタロスが言葉を続けようとする前にウラタロスに遮られる。そんなやり取りに呆れつつ幸太郎は操縦席に向かう

「これを、戦いが終わった後でいいから…良太郎君に渡してくれないか…」

全身を茶色い衣服で包んだ人物。

「これを…じいちゃんに？」

幸太郎は戸惑いながらそれを受け取る

彼は俯く。

「今回のことは何も変に起こったことじゃない。未来から来ているきみなら分かるだろう…」

そついうと彼は居なくなつた

そんなやり取りを思いながら、幸太郎は操縦席に着いたパスを入れる。

デンライナーは過去へと向かった。

Episode : 34 1月17日 本当の思い (3) (後書き)

今日は体調を崩して、家に居ました。

早く直って欲しいなと思ってます。

自分が一回、考えたのより短くってます。

一回書いた奴全部消しちゃったんだよね…

それで書き直し…

Episode : 35 1月17日 本当の思い (4)

「良太郎！」

心配する、ハナの声が段々大きく聞こえてくる。

「大丈夫なの？」

真理は心配そうに肩を撫でる

「いつから…」

「いつから知ってたの？」

良太郎は悲しげに聞く

「最初からだ。」

侑斗は答える

隣では、デネブが、少しおろおろしているが、侑斗はそれは余り気にしていないらしい。

「お前！じゃなんで良太郎に教えてやらなかったんだよ！」

巧は少し頭に来ていたからなのか声をあらげながら言う。

「最初からの意味が違っただよ」

そついいながら、侑斗は、

2009年 1月17日と書かれたライダーチケットを懐から取りだし、床下おく

「私達が、当初知ってたのは、今日何かが起こると言うことだけだ

ったの」

八ナも床下に置かれた物を見ながら言う。

「でも早く、教えてあげれば、良かったんじゃないかな？」

真理はふと疑問に思った。

最初から教えていたらここまで事にはならないと思ったのだ。

「言おうと思ったださ。でも…さ、その時丁度見つけちゃたんだよ…。
野上の両親

とこの日付は同じ日なんだって。」

デネブは、恐々と話す。一体なにに恐れているかは、よく分からないが、

「でも！教えてくれても良かったんじゃない！」

良太郎は必死に言う。そんな良太郎にデネブはさらにおろおろし、
終いには、

侑斗の後ろに隠れてしまう。侑斗はそんなデネブを呆れながら見ながら、

「教えても、お前は忘れただろ。」

侑斗は厳しい一言を良太郎に浴びさせる。それを聞いて一瞬で黙ってしまった

。「おいつ！なんだよ。あれっ！」

巧が指差す先には次々と消えていく建物

。「過去であいつらが暴れてるんだよ」

侑斗は険しい顔を崩さずに言う。だが、不意にデネブの声が頭の中で、響く。

「少し可笑しくないか？ゆうと？」
少し引つ掛かる事があるのか訪ねてくるデネブ。

「何がだよ。だいたい普通に喋ればいいだよ。俺はお前の目の前に居る訳だし」

声に出さずにデネブが喋ったため侑斗も一応声に出さずに話す。

「いや〜だって。今回のあいつらの目的は、恐らく小さいころ野上がいたデパー

トだろ？なのに何でそれと関係ないビルや建物まで消えていくんだろと…」

自分な考えを言うデネブ。それを言い終わった後暫くしてか侑斗はある事に気付いた

「早く過去に行ってあいつらを倒した方がいいかもな…。じゃないと過去が変わ

るぞ…行くぞ。野上」

侑斗はそう言つと、良太郎に顔を向ける。しかし良太郎はそれを無視するかの
ように逆の方向を見る。

「お前！わざわざ過去に行ってこいつに両親の死に目を見せる気が？」

巧は、侑斗の態度が気に入らなかった。

「…そんな事は言っていない。だが、野上は、電王だ」
侑斗は否定をする。

「確かに、良太郎君は電王よ。でも、その前に良太郎だって一人の

人間じゃない」
真理が必死に、訴える

「僕は行くよ……」
次々と消えていく、ビルを見ながら良太郎は立ち上がる

「だって、僕は、時を守る者、電王だもん」
良太郎は笑顔で言う。

「良太郎……」
そんな、良太郎を見ながらハナは嘆いた

「侑斗……チケットの日付が」
良太郎が床に置かれたチケットを指差す。
チケットに、書かれた日付は、2009年 1月17日から、1992年1月17日に変わっていた。

「過去に行けって、事か」
侑斗は、床に置いたチケットを再び手に取る。

「早く。ゼロライナーに。幸太郎達は、先にデンライナーで過去に向かっているらしいからな」

侑斗が言うのと近くでゼロライナーの汽笛の音が聞こえてくる。ゼロライナーに乗る為に、侑斗、良太郎そして、ハナとデネブは、ゼロライナーのるため近く

のドアに手を掛ける。

「俺も行ってもいいか？」

巧が一步前に踏み出していう。真理も私もと言う感じで前に出てくる。

「勝手にしろ」

それだけを言うと、ドアをあけゼロライナーに入る。それに続き、最後には、巧と真理が入って行った。

デンライナーより少し遅れてゼロライナーも過去へと向かった

Episode:35 1月17日 本当の思い (4) (後書き)

最近、携帯の方で文を考えてるんですけど、
侑斗という感じが、携帯では、変換できないんだよね…。どっやっ
て打つたらいいのだろう…。

次からは、過去中心に行きたと思います。

最近、海棠だけ出すの忘れてた…。

色々設定が変なところが出てきてます。
そこら辺は。許してください。

Episode:36 1992年 1月17日 一時の時間(1)

1992年 1月17日

「さう今日は此処！最近話題のデパートからの中継です」
カメラの目の前でアナウンスする女性。

このデパートは、最近できた新しく話題性のあるデパートだった。

「この建物は、スマートブレインの花形社長の全面的な協力により
出来ており…」

アナウンスの女性は説明する。

それからあと少しだけ中継は続いていた。

「あつた！ねえ？これで良いかしら？」

一人の女性が近くに居た男性に話しかける

「おっ！これはいいね」

となりにいた男性は女性が示した者に感心を持った。

「じゃ、これを良太郎に買つと言うとで良いかしら」

一人の女性が言うと、隣の男性が俯く。

この二人は、良太郎の両親である野上加代子と野上真一である。

「じゃ…、良太郎と愛理を迎えに行きましょう」

先程選んだ物をしっかりと買い

良太郎達がいる所へ向かった

此処には沢山の子供達がいる。デパートにはだいたい、親が買い物に行っている
時に、子供達が遊べる所がだいたい一つはある。

「良ちゃん、それに愛理ちゃん、そろそろ休憩にしましょう？」
一人の女性が声をかけるとその2はその女性の方に向かっていく

「楽しかった？」
女性は、愛理の方に声をかける

「楽しかったよ。おばあちゃん！良ちゃんなんか転んでばかりでさ！」
愛理は笑いながら良太郎の方をみて喋る。それをきいた良太郎は必死に言った姉
を軽く押している

「良ちゃんたら、本当にドジなのね」
おばあちゃんは笑いながら、良太郎の頭を撫でる

「おーい、愛理！それに、良太郎！」
遠くから声が聞こえてくる、
先程買い物を終えた、両親だ。

「はーい」
おばあちゃんが返事をする。

その時、建物に大きな振動が起きた。

建物の地下

「これでいいな」

一人の者が建物の基礎となる部分を壊していた。それを壊した途端に建物は重心をなくし壊れ始めた。

「何をしている」

男の後ろからまた一人別の影を現すがそれは人の姿とは言えずオルフェノクの姿だった。

「花…形…社…」

その男性は言葉を言う前に花形社長否、花形社長が姿を変えたによつて、倒された

それが終わった後花形社長は人間の姿に戻りその場を離れた。

建物の崩壊が少しずつ始まった。

それにより、中にいる人はパニックに陥って混乱していた。しかも子供が沢

山いたためか子供の泣き声も多く聞こえてきている

「急がないとね」

加代子が回りを押さず駆けずに進んでいる。「おかし」の押さない、駆けない、

喋らないの3法則を守っているのである。

しかし、後ろには人がつまっていて遅く歩いている、加代子

を押してくる人が出てくる

「きゃあー!!」

押された反動でか手荷物が下で氾濫した。回りには走っている人が多いわけで荷物物は更に遠くに飛んでいく。

「どうしたの？」

おばあちゃんが異変に気付き尋ねた。

「荷物が……」

加代子は暗い声でいう

「加代子さん今は早く逃げないと。食料とかはまた今度買えばいいじゃないか？」

真一が言うが、加代子は首を横に振る。

「あれだけは……。見つけないと」

加代子が必死に言う

「そうだな……。お母さん、良太郎と愛理を連れて先に逃げて下さい」
真一は真剣な目で言う。そんな彼から何かをおばあちゃんを感じとったのだった。

「二人共……ちゃんと生きて帰って来るのよ」

おばあちゃんはそう言うと、半泣き状態の良太郎とそれより少し落ち着いた愛理

を引き連れ、その場を後にした

デパート入り口前

近くにあるドアが勝手に開く

そこには、過去に移動した、4人の姿があつた。

「さあ！始めますか？人間共の抹殺を」

村上がそう言う、ローズオルフェノクに、北崎は、ドラゴンオルフェノクになつた。

Episode: 36 1992年 1月17日 一時の時間(1) (後書き)

主に、過去のメンバー中心になりました。

この回の愛理と良太郎は文字通り、本当に子供の時です。見分けが着くようにするかは考えましたが、

まだ大丈夫だと思いそのままにしました。

Episode:37 1992年 1月17日 一時の時間(2) (前書き)

ただいま試験勉強していました。
休憩中です

「なんだ！あいつら?!」

突然人間から変化した人達をみて人々は驚いた

「さて…この中から何人の同胞が生まれるか…見ものですね…」

村上が周りを見渡す。其処にはその姿に怯えて中々その場を動けない人が沢山いた。

「じゃ、早速初めましょうか…」

ロブスターオルフェノクは、剣を出し自分の一番近くにいる男性の心臓に剣を突き刺した

「きゃあああ!!人殺し!!」

「助け…てく…れ」

心臓を刺された男性は、必死に立ち上がったがすぐに灰になってしまった

「やっぱり? まあ一番最初からオルフェノクになる人なんていないと思っただけど」

ロブスターオルフェノクが、一歩ずつゆっくりと近寄っていく

「私はある姿に成りたくない!」

女性は反対側に逃げだしかし其処にはもう一人の異形「イマジン」が多数現れた

前と後ろを挟まれ身動きがでなくなってしまうた

「さあ、お楽しみはこれから」

ドラゴンオルフェノクはそう言っ走りだした。

「キイイイイ」

大きなブレーキ音と共にデンライナーが現れた。

イマジン側には、幸太郎とモモタロスイマジン達、村上達オルフェノク側にはと

草加と木場がそれぞれ立っていた。

「あゝまだ何もやってないのむかつくな」

ドラゴンオルフェノクは声を苛つかせながら出す

「君たちの好きにはさせないよ」

木場はそう言いながら自らのオルフェノクの姿、ホースオルフェノクに。

258

「きさまたちは俺が倒す」

草加はそう言いながらカイザフォンを構える

9 1 3 s t u n d y b y

「変身！」

c o m p l e a t e

草加はカイザフォンをセットし変身し、仮面ライダーカイザに変身

した。

「変身。」

幸太郎は腰に電王ベルトを巻いて、NEW電王のストライクフォームに変身した。手には武器に変身したマチューテデイが握られている。

モモタロス達も各自自分達の武器を構えている。

「いいわ。どうせ消すつもりだたあなた達、ここで消してあげる！」
ロボスターオルフェノクはそう言って走りだした。その後ろには
ローズオルフェノクと
ドラゴンオルフェノクが続いた。

しかし、其処には、カイがない事にみんなはまだ気付いてなかった。

「大丈夫。きっと」

おばあちゃんは優しく声で言う出口に向かっていたが、途中で建物が大きく揺れたためか、途中で道が塞がれていた。

「うん…。ねえ、おばあちゃん。良ちゃんが、いなくなってる」
愛理が言つとおばあちゃんは辺りを見渡す。するとさっきまでいた良太郎の姿が無かった。

「良ちゃん。何処に行ったのかしら？」

愛理の声だけが周りには聞こえていた。

「……は……ど……?」

良太郎は涙声で言うが周りには人がいないため返事がない。その時、建物が大きく揺れて小さな瓦礫が降ってきた。

「あ……」

思わず目を瞑る良太郎そして目を開けるとさっきいた場所とは違う場所に立っていた。

「あれ……?」

良太郎は辺りを見渡す。すると、後ろに人影が見え振り向く。

「……」

そこに居たのは、全身が真っ白より、灰色に近い色で、顔は動物の顔の狼を形どっていた

「う……わあ!」

目の前にいた灰色影に驚いて良太郎は声をあげる

「当たりまえか」

彼は当たりえのようがいい、その場を離れようとする

「あの……」

いなくなろうとした彼に良太郎は思わず声を掛ける

「助けてくれて…ありがとう」

良太郎は彼にそう言った

それだけを聞いて彼はすぐにいなくなっていた。

「さうで、何処にいるかな？」

カイは崩壊を始めた建物の中にいた。何かを探しているかのように…

「野上… 分かってるだろうな」

「分かってるよ。此処は過去。昔にすでに起こった出来事」

カイとは違う場所にいる良太郎と侑斗。真理とデネブはゼロライナ
ーで待機し

ていて、巧は外で戦っている方に合流していた。

何故このように別れたかは少し前に遡る

まず、一応設定ではこの時代の良太郎は4歳という設定があるので
すが、4歳児は、此処まで喋るのだろうか…
多分喋りませんね…。

多分また後で追記でなにか書くかもしれない。

試験が近いので多分これをやったら少し間を空けると思います(多分)。

でも内容事態は携帯の方で考えてるから…。
なんだかんだ言ってくるかも知れませんが

「おい。そろそろ過去につく。準備しておけ」
侑斗が外を見ながら言う

「真理お前はしっかり此処に残れよ？」
巧は立ち上がりながら真理に注意を施す

「分かってる。ハナさんも残るでしょ？」
真理がハナに聞くとハナは少し困りながら

「えっ…。残るわよ」
ハナも一緒に行きたかったみたいだが、此処は少し口裏を合わせた
みたいだ。

「おい、デネブ」
侑斗は少し離れた所にいたデネブを呼びつけた。呼ばれたデネブは
すぐにゆう
との近くに言った

「なに？侑斗」

「お前はあいつらと一緒にゼロライナーに残つとけ」
侑斗言うとデネブはどうしてか分からずに首を傾げてる

「2人が心配して外に出ないようにするためだ」
侑斗がそう言うとデネブも納得したみたいだ。

「侑斗着くよ」

良太郎が言う。

ゼロライナーは過去に着いた。状況はこちらの方が押されてた。

「おい。早く降りるぞ」

巧はすでに乗車口にいるが、良太郎だけがまだ外を見ていた。

「おい、野上どうした？」

その場から動かない良太郎に不思議に思ったのか侑斗が聞くと

「可かしい…カイだけが…いない？」

良太郎が言う。それを聞いてゆうとも改めて外をみる。

「そのカイって野郎は、別に目的があるんじゃないか？」

巧の言葉に2人は考えた。

「もしかしたら、カイはあの人達とは違う目的があったのかな？」

良太郎は思った

「違う目的？」

巧が声をあげながら言う

「うん…。ゆうと、僕はカイを探す。」

そう言いながら外に降りて建物に入っていく良太郎。

これを不審に思った侑斗も後を追った。

「意気込んだのに、その程度ですか？」

村上が笑いながら言う。

状況は3対2で、ホースオルフェノクとカイザがふりだった。

「しよせん、あなた達は、一度は死んだもの」
ロボスターオルフェノクは再び剣を構える

「また、僕に勝とうなんて無理な話なんだよ」
三体のオルフェノクに囲まれ身動きができない2人

「終わりなのはお前らの方だ」

遠くからファイズの姿である巧の声が聞こえた。
良く見ればあくセルフォームになっている。

ファイズはそのまま腕にスタータースイッチを押す。

start up

その音と共に、ファイズは高速移動を始めた。

10、9、8、7、6、5、4、3、2、1

Reformation

その音と共にアクセルフォームから普通のファイズの姿に戻る。ド
ラゴン・ロボ
スター・ローズオルフェノクは少し離れた所に飛ばされていた。

「乾君…」

「これで、3対3だな」

カイザはそう言いながら、構えを持った。それに続くように2人も武器を持った

「行くぞ！」

ファイズの声と共に3人は駆け出した

「くそっ！全く減らねぞ！」

モモタロスが、剣を振り回しながら言う

「雑魚って言うてもこれだけいるとね……」

ウラタロスは敵の攻撃を交わしながら槍で敵を払う

「せやな……責めて変身できれば……」

「なに言ってるの？モモタロス達は、実体を持っているからパスとベルトがあれば変身出来るじゃない？」

幸太郎は当たり前まえのように言う

「確かに変身出来る……けどな」

モモタロスはイライラしながら辺りを見回す

「こんな囲まれてちゃ、どうにもならないだろうっ！」

「そういえば、リュウタは？」

ウラタロスはリュウタロスが居ない事に気が付く

「み〜んな、ちゃんと避けてね」

リュウタロスの武器の弾丸が上から降ってきた。その弾丸をモモタロス達は慌てよける

「てめえ、危ねえだろ！」

「避けてって言ったじゃない！」

モモタロスが言った事に反論するリュウタロス

「間が、ないんだよ！間が！」

「モモタロスに言われてたくないよ
ますます、熱くなる2人

「まあ、先輩はともかく落ち着いてリュウタ。さっきまで何処に行
つてたの？」

ウラタロスが、リュウタロスを宥めると懐からパスを取りだし、3
人に渡した。

「さっき、オーナーから渡されたんだ〜」

リュウタロスはそう言いながらベルトを巻いた。それにモモタロス
達も続いた

「〜変身」

モモタロスは、ソードフォーム

ウラタロスは、ロッドフォーム

キンタロスは、アックスフォーム

リュウタロスは、ガンフォーム

にそれぞれ変身した

Episode:38 1992年 1月17日 一時の時間(3) (後書き)

今日夢で面白いのを見ました。

それをなんとか小説に出来ないかな

とか考えてます。

「こわかったよ…」

小良太郎は涙を拭きながら言う

「大丈夫だ…にしても出口がないな…」

真一が辺りを見回しながら言う何処の場所も瓦礫で塞がれている

「此処出れるよね？」

「ええ…出れるわよ」

加代子は優しく言う

「あつたぞ。」

真一が指差す先には穴がある。人一人通れるか通れないかの穴。

「まずは、佳代子がいってくれ。その後良太郎で最後に俺が入るから」

真一が穴の前で言う。それに従うように加代子は穴に入り、次に良太郎が入った。

最後に真一が入った

「早く離れるぞ！」

建物が再び揺れ始めた。

「いた…」

小良太郎が小石につまづいた

上からは瓦礫が落ちて来ている。

「危ない」

二人が飛び出したのはほぼ同時だった。

「パパー。ママー。」

小良太郎は叫ぶ。2人は良太郎を外に出した代わりに自分達が瓦礫の下敷きなり体の半分が挟まれている。

「みーつけた」

うしろから声が聞こえて振り向いた。そこには、一人の若い男性がたっていてその人物はカイだった。

「あれ？返事は？」

カイは、小良太郎の所まで覗きこんだ。小良太郎はカイの笑顔が怖くなったのか

後ろに下がっていった。その時また石につまづいてしまったためそのまま後ろに倒れてしまった

「あれ？倒れてちゃた？まあ、いいや…俺の目的は…あれなんだっけ？」

カイは倒れた小良太郎を見ながら考えこんだ

「カイ。」

カイの後ろから声が聞こえカイが振り向くとそこには良太郎と侑斗がいた

「あれ〜おいついちゃたんだ…残念」

カイは、笑っているが何かおかしい。

「!!!!」

二人は目を疑った。

「本当は、此処でお前を倒せば何かが変わると思ってたのかもな！

」

カイは砂になっていく手を見ながら言う。

それだけを言っただけでカイは消えてしまった。

「ねえ、侑斗…今回の事件は本当に時間の捻れで出来た事件なのかな？」

「どうして、そんな事をきく？」

良太郎の質問に、ゆうとが聞く

「僕思うんだ。今回の時間の捻れでもなんでもない…起こるべきして、起こった

んじゃないかな？って」

「両親が死ぬのもか？」

侑斗が聞くと良太郎は顔を暗くした

「…それは、今でも嫌だよ。お母さんとお父さんがいたらどれだけ幸せか…。でも、この事件を忘れてたから今のモモタロス達がいる僕が居るんじゃないかなって思うんだ」

良太郎はゆっくりと言った

「お前らしいかもな…」

侑斗が少し笑いながら言う

「あの…」

後ろから微かに声が聞こえた

その声は体半分が瓦礫に埋もれた加代子の声だった

「俺達はもう助からない…でもこれを…あの子のために渡して欲しいんだ」

真一は気を失ったままの良太郎に目を向ける

そして最後の力を振り絞って自分の手に持っていた袋を良太郎に渡した。

「あの子には、生きて欲しい…今もこの先ずっと…」

「野上！」

侑斗が叫んだ。

建物の多くがくずれ始めた。

これが最後の崩壊になるだろう。

「でも…。」

両親に目を向ける良太郎

「言われただろ…この先ずっと生きて欲しいって…」

良太郎は小さく頷いた。

侑斗は、小さな良太郎を抱えあげた。

「俺達も此処を離れるぞ」

侑斗はそっぴい走っていく

良太郎達がでて建物は崩壊した

「良ちゃん…」

愛理が心配そうに建物をみつめている

「良ちゃん!」

おばあちゃんが声を出す

そこにはゆうとに抱えられた、小良太郎がいた

「親切に有り難うございます。あの…この子の両親は？」

おばあちゃんが聞くとゆうとは首を横にふった

「分からない…俺が見つけたのはこいつだけだ…」

ゆうとは、小良太郎を預けその場を離れた

「侑斗!早く電車に乗って!」

八ナが乗車口から叫ぶ。

「ああ…」

侑斗は電車にのりこんだ

電車にはほとんど皆が集まっていた。木場と草加を除いて…

「もうあいつらとは会えないのか?」

巧は椅子に座って炒飯を食べながら答えた

「無理ですね…彼らは一度死んだ人間ですしね」
オーナーは当たり前前の用に言う

「それにしても…勝手にああ言う方を乗せて貰ったら困りますが…
今回は仕方ないですね」

オーナーは隣の車両に目をやった

「仕方ないだろ…あいつは不老不死だ… このままこの時代に残せ
ないだろ」

巧は少し呆れながら言う

「まあ、そうだね」

ウラタロスも納得したように頷いている

「見張りが居なくていいのか？」

侑斗が心配そうに言う

「大丈夫じゃないの？一応気は失ってるし。檻のなかだし」
ウラタロスは差ほど興味がないからか少し呆気ない

「でもオルフェノク相手じゃ簡単に壊れるんじゃないか…」
真理が心配そうに聞く

「心配ないよー。多分外からしか壊れないから」
リュウタロスが笑顔で言うときンタロスも笑いながら言った

「せやな、あれから出るのは大変やったが、前に壊れてなくなった
はずじゃ…」

キンタロスが深く考えてると

「私が似たのを作りました」

オーナーが言つと皆は少しやっぱりと言つ顔をしていた

「みなさん、良太郎ちゃん達が帰ってくるまでコーヒーでも飲んで下さい」

ナオミはトレーに置かれたコーヒーを一つづつ置いていった

此処は事故現場近くの病院

殆んどがこの病院に運ばれていて、良太郎と幸太郎はある一室の前にいる

「じいちゃん…本当に大丈夫なの？俺がやってもいいんだよ？」

「大丈夫…それに僕がやらないと」

良太郎はそう言いながら病室に入っていく。帽子もなにもかもを薄い茶色に包んで入っていく。

野上良太郎と書かれた病室に

「どつすれば…」

おばあちゃんは悩んでいた

小良太郎は幸い怪我は浅かった…しかし気絶する前に頭を強く打った、為かそれ

とも他に理由があつたからか、記憶が曖昧になり今日の記憶が無くなっていた

「…失礼します」

部屋に入ってきたのは薄い茶色に包んだ良太郎で…

「貴方はだれ？」

愛理は不思議そうに聞く

「僕は配達人ですよ…」

良太郎はそう言いながらある物を取り出す

「それは…」

おばあちゃんはそれをみて涙が出てきた。それは紛れもなく加代子と真一が買ったもの。

「それ、どうするの？渡すの良ちゃんに？」

愛理は立ち上がりながら聞く

「今は渡さない方がいいと思う」

「貴方はどうしてそう思うの？」

良太郎が言った事におばあちゃんが聞き返した

「この事で仮に自分のせいで無くなったと思ったたらこの子は一生気づつよ…だからせめて時が来るまでは…」

「嘘をついてこと？」

愛理が聞き返した

「それも、それで傷つかない？」

おばあちゃんも言い返す

「それでも！今はこうするしかないんです…」

良太郎は悲しそうに言う

「分かったわ…」

おばあちゃんは彼の言葉から何かを感じとった

「ありがとうございます…」

良太郎はそう言いながら病室を出ていった

「でも仮に今嘘をついてもいつかは真実を言わないといけない…
い
つ
言
つ
の
？」

愛理が言つとおばあちゃんが思いついたように言つ

「あの日にしましょう…これをかう事にしたあの日に…」

「じいちゃん…お疲れ様」

幸太郎は優しく言つ

「これで良かったんだよね…」

此処は過去の時代にあるミルクティッパ
そこで作業する一人の男性

「どづいつつもりだ…」

ゆうとはその人物に聞く

「どづいつつもりもないよ…」

その男は黙々と作業を進めている。アルバムを未来では望遠鏡が置かれている下に置いていく

「これは決まった事だとしても言いたいのか………桜井」
ゆうとは彼、自分の未来に当たる桜井に聞く

「そうだね……」
積み重なりおわり一枚の写真のみを残している

「この事件の事をこの良太郎君は覚えてない……時が破壊された場合特異点が軸になり時間が再生去れる……だからこの日だけ曖昧になる」
桜井は歩きながら言う
見れば体の一部から砂が出始めている

「ゆうと……野上達が帰ってきた……そろそろ戻らないと」
デネブが言うとゆうとは出入口付近まで行った

「愛理をそれに良太郎君を頼んだよ……」
桜井はそれだけを言うと消えていったまるではじめから居なかったかのように……

「野上の事まで頼むなよ……」
ゆうとは少し笑いながらその場を後にした

2009年 1月17日

…何処か

「いつか…此処から出てやるわ…。私は絶対に諦めない」
ロブスターオルフェノクの声だけが響いていた

「また会えたらいいな…」
巧は良太郎に言う

「何言ってるんですか？啓太郎さんの店に行けばきっと会えますよ…」

良太郎が笑顔で言うが啓太郎には笑顔がない。

「啓太郎…」
真理は心配そうに言う。

「もう少しだけ長田さんと居たかったな…」
啓太郎は嘆いた

「じいちゃん…そろそろおれも元の時代に帰るね」
幸太郎が言うと再びデンライナーが来た

「また会えたらいいね」
良太郎は笑顔で言う

「そんな何度もは来れないよ」

「そうだね…でもまた会えるよ…いつか未来でね…そうだよね？モモタロス」

良太郎がモモタロスに言葉を返すと

「そうだな…俺達は繋がってるんだ…例え離れててもな」

モモタロスが言う

そして電車に乗り込む

「良太郎…また会おうね！約束だよ」

一回転しながらリュウタロスも電車に乗った。

ウラタロスとキンタロスは片手をあげながらテディはお辞儀をしながら

「そうだね…いつか未来でまた」

幸太郎はそういい良太郎と握手をしながら電車に乗り込んだ

「良太郎君今回の事件は無事に解決されました…時間も元の状況に戻りました」

オーナーは良太郎の周りを周りながら言う

「しかし！また時の運行が乱れた場合は…」

オーナーが覗きこむ

「分かっています…その時はまた戦います…僕は電王だから」

良太郎は決意に溢れた目で言う

それを聞くとオーナーは電車に乗り込んだその後電車はすぐに発車した

デンライナーは未来に向かった

今日やっと試験が終わりました。

結果は最悪でした…

前話に出てきた檻は、

牙王の時に、モモタロス達が閉じ込められてた檻です。

色々書きたい事があるのですがそれは次回に書きたいと思います。

因みに次回で最終回です。

Episode: 41 2009年 1月17日 また会う日まで (2) (前)

今回で最終回です

「ねえ、皆と一緒に居たいとか、思わないの？」
啓太郎が尋ねる

「思つよ…。」

「でも…いつか未来できつとまた会える…。」
良太郎は何処か遠くを見ながら言う

「良太郎君！私美容師なの。だから髪の毛を切る時は来てね！サービスしてあげるから」

「じゃ、また洗濯物がある時は来て。僕もサービスするから」

「それは駄目だろ。啓太郎。ただえさえ赤字経営なんだから」
巧が啓太郎を叱るように言う
真理も当然のように啓太郎に言い返す

「じゃあな！また」
巧が軽く手を振ると真理と啓太郎も続けて手を振った。
しばらくすると3人の姿も見えなくなっていた

「良太郎君私達もそろそろ帰るね」
里奈が声を掛ける
すでに三原と共にバイクに乗っていた

「また、コーヒー飲みにきてくださいね！」

良太郎が発したバイクに聞こえるように大きな声で言うと
バイクからは手でOKサインが出ていた

「皆行っちゃたね……」

「そうだな……」

良太郎は隣にいた侑斗に声を掛ける

「また会えるかな……」

良太郎が小さく言うと

「会えるさ……」

侑斗小さく言った

エピソード

「良ちゃん!」

「姉さん……」

ミルクディッパーから出てきた愛理。

しかし少し自分に不甲斐なさを感じていたからか良太郎はその場を
離れようとし

たがそれを侑斗に止められる

「話ぐらい聞けよ。野上……」

侑斗が言うと良太郎は戸惑いながら少しだけ俯いた

「良ちゃん…これ」

愛理が差し出したのは表紙は少し古めな感じのアルバムだ

「これは………」

良太郎は1ページづつ捲りながら驚いた

「これがお母さんとお父さんのプレゼント」

愛理が思いだすように言う

「本当はもう少し早く渡したかった…けどお母さんとお父さんの事をなかなか切り出せなかったし…写真も殆んど無くなってた…だから」

愛理は言葉を詰まらせる

「ありがとう…」

良太郎は涙を流しながら言う

デンライナー

先に出発したが実は今のやり取りをこっそり見ていた

「過去の繋がりがこう言う風になっていたなんてね…」
ウラタロスは深く考え込みながら言う

「幸太郎：あんたひよつとしてあのアルバムの事知ってたんじゃ…」
この事件が解決した事でコハナに逆戻りしたコハナ

「アルバムの事は知ってたよ。だって未来のじいちゃんが、よく見せてくれたからね」

「やっぱり、じいちゃんはいちいちゃんだよな…」

幸太郎は窓から遠くに見える良太郎をみる。嬉しそうにアルバムをめぐる良太郎がいた

END

やっと書き終わったけど、最初に考えてたのと少し変わってしまった…すいません。

まずはいろいろと反省点を書きたいと思います。

原作キャラでまったく触れられなかった琢磨逸郎

途中からまったく登場しなくなった、海堂直也

闘いのシーンをあまりかけなかったこと。

誤字脱字が多く読みにくい、所があった事。

矛盾点やよくわからないことがあった事。

本当にすいませんでした

これは補足ですが…

39話で出てきたロブスターオルフェノクを閉じ込めた檻は、牙王の事件の時にモモタロス達が閉じ込められていた檻です。

此処まで読んでくれた方有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7258f/>

仮面ライダー電王vs仮面ライダー555

2010年10月10日21時08分発行